



TITLE:

殷代における畜産の變革

AUTHOR(S):

岡村, 秀典

CITATION:

岡村, 秀典. 殷代における畜産の變革. 東方學報 2000, 72: 1-48

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66834>

RIGHT:

殷代における畜産の變革

岡 村 秀 典

はじめに	一	4 ウン優位型都市文化の出現	一七
一 遺址出土の哺乳動物骨	二	5 ヒツジ優位型牧畜文化の形成	二一
1 分析の目的と方法	二	二 ト骨の變化	二五
2 類型の設定	七	三 殷代における家畜飼養の多樣化	三六
3 プタ優位型農耕文化のひろがり	一一		

はじめに

人類の生活史は、動物を殺してその肉を食べるところからはじまり、やがてその毛皮が衣服や住まいなどに利用され、骨や角が道具として利用されるようになった。いまからおよそ一〇〇〇〇年前に動物の家畜化がはじまると、人類の生活はいっそう多様化する。たとえば、草食性のヒツジ・ヤギ・ウシなどの飼育に比重をおいた西アジアでは、それを生かしたまま乳や毛を利用すること、つまり消費財としてではなく資本財として家畜を利用する牧畜や酪農がはじまった。いっぽう穀物栽培を中心とする東アジアの農耕社会では、プタをはじめとする肉食目的の副業的な畜産がおこなわれた。また、

技術の進歩とともに、ウマやウシなどの大家畜を運搬や車・犁の牽引に使うことが世界的にひろまり、農業生産や情報の傳達に大きな變革をもたらした。人と動物とのさまざまな關係が、人びとの生活様式を規定する大きな要因となっていたのである。

古代中國では、馬・牛・羊・豕・犬・雞の六畜が代表的な家畜とされ、馬をのぞく家畜は消費財としておもに食肉に利用された。禮書をはじめとする中國の古典をみると、このような家畜は祭祀のなかで生け贄として神靈にささげられたり、饗宴などさまざまな共食儀禮に供用されたことがわかる。また、牛・羊・豕を大牢、羊・豕を少牢といい、牛・羊・豕の順の等級づけと身分に應じた犠牲の種類がきまっていた。供犠をふくめたこのような肉食儀禮は、中國の風土と社會に適應した先史時代の肉食文化が殷周王朝の成立とともに王權によって禮制のなかに秩序づけられたものであり、本稿はその中國的な畜産と肉食儀禮の形成過程を考古學の方法によって明らかにしようとするものである。その主要な論點はすでにいくつかの論文のなかで言及してきたが〔岡村 一九九八／一九九九〕、その後公表された動物考古學の分析データを加えて、やや詳しく検討してみたいとおもう。

一 遺址出土の哺乳動物骨

1 分析の目的と方法

遺址から出土する動物骨には、人びとが肉を食べた残滓と意圖的に動物を埋葬したものとがある。前者のばあいには、ばらばらになった骨がゴミ坑や地層から雜然と出土するのにたいして、後者のばあいは、人爲的に掘られた坑から動物の全身骨がきちんと出土するのがふつうである。ここでは前者の廢棄された動物骨を中心にみることにしたい。

遺址から出土した動物骨の分析は、革命前の中央研究院による河南省安陽市殷墟の發掘と同時にすすめられた〔徳・楊一九三六／楊・劉一九四九〕。ここでは殷墟出土の哺乳動物骨が野生土着動物、家畜、輸入外國動物の三種に大別され、あわせて今日の華北に生息しないバク⁽²⁾（獾）・スイギュウ（水牛）・ゾウ（象）などをもとに殷代の氣候について議論された。林巳奈夫もその後の新しい發掘例を加えて動物相と古氣候について論點の適切な整理をおこなったが〔林一九五八〕、近年の動物考古學は、むしろ新石器時代に焦點を移し、動物相から人びとの生業を復元する生態學的な研究が中心となっている。甲元眞之は新石器時代の動植物遺體を網羅的に収集し、飼育や狩獵の對象となった動物の種類をみることによって生業の地域性を明らかにした〔甲元一九九二〕。また、遺址から出土する動物骨の種別別の數量的分析（定量分析）が實施されるようになってきたことをうけて、大貫靜夫は新石器時代から秦漢代まで地域ごとに動物相と環境の變化を總括し〔大貫一九九五〕、袁靖は新石器時代におけるブタ（家猪）などの家畜とシカ（鹿）をはじめとする野生動物との比率の地域的・時間的變化をまとめている〔袁一九九九a〕。

社會が複雑化し、文明や國家が成立した時代の動物考古學は、歐米では生態學的な研究よりもむしろ生産と消費の問題、社會階層や民族・文化との關係を射程にした研究がすすめられている〔Crabtree 1990〕。たとえば古代メソポタミアでは、動物骨の分析や粘土板文書によって都市とその周辺の牧畜民との關係が詳細に解明されている〔Zeder 1991／谷一九九七〕。また人類學では、文化唯物論の立場から動物と食文化との關係が多角的に検討されている〔ハリス一九九四〕。中國では甲骨・金文などの出土文字資料や禮書をはじめとする古典に動物にかんする記述が豊富にあり、動物考古學は、その對象を新石器時代や無文字社會にかぎらず、このような文字資料を参照しながら、都市と農村における家畜消費のちがいを、社會身分と食肉との關係、家畜の地域性など、文明社會における人と動物とのかわりを解明する方向に研究をすすめるべきであろう。本稿はそうした新しい視角からの一試論である。

動物骨の數量的分析には、二通りの方法がある。ひとつは骨の形狀から動物の種類を同定し、種類ごとの標本數を計測する方法である。もうひとつは最小個體數の計測法で、動物の種類と骨の部位を同定し、もっとも數の多い部位の標本數からその動物の個體數を復元する方法である〔袁一九九九a〕。大型動物の大きな骨は、捨てられずに道具として利用されるが多く、遺址で採取された骨が消費された動物の個體數をそのまま反映しているとはいえないから、どちらかといえは最小個體數のほうが適切である。

數量的分析の報告例はなお少なく、分析對象の時代や地域が偏っている。本稿での動物骨の鑑定はすべて中國側の報告にしたがうが、標本數が多くて數量的に信頼できる報告を選んで哺乳動物骨について整理したのが表1である。シカ科をニホンシカ(梅花鹿)・キバノロ(麋)・シフゾウ(四不像)などの種に細別することは、古環境の復元には有効だが、本稿の趣旨からはずれるので、ここではすべてシカとしてまとめ、必要に応じて本文に記述することにした。シカ科はすべて狩獵對象の野生種と考えられる。また、細別のむずかしいもの、たとえばコウギユウ(黄牛)とスイギユウはウシ、ヒツジとヤギはヒツジとしてまとめ、とくに區別していない。その他としたものは、ほとんどが野生動物で、イノシシと報告されているものはそこにふくめた。ただし、野生種か家畜種かは、個々の骨にあらわれた形質上の變異による判別ではなく、母集團の年齢構成をもとにその全體についてどちらかに判定することが多いため、ウシ・ヒツジ・ブタのなかには若干の野生種がふくまれている可能性がある。とくにウシは、骨の形質から野生／家畜を判別することがむずかしく、中國の報告ではすべてのウシを家畜としているが、ほとんどの遺址でウシは一〇%に満たない低い比率であるところからみると、本格的な畜産がおこなわれていたとは考えがたい。ただし、オオカミ(狼)が家畜化したとされるイヌは、家畜とみなしてまちがいないが、數%でいどの低い比率になっている遺址が多いのは、食用にされることが少なかったからであろう。このほか標本を採取し鑑定する精度などにも問題があり、數値に多少の誤差があるのはやむをえない。ここでは個別

表 1 遺址出土哺乳動物骨の構成

遺 址	資料数	ウシ	ヒツジ	ブタ	イヌ	シカ	他	文 献
黑龍江密山新開流 ○前 4 千年紀前半	53 %	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (9)	23 (43)	25 (47)	黑龍江省1979
吉林農安左家山 1 期 ○前 5 千年紀	120 %	2 (1)	0 (0)	18 (15)	2 (2)	20 (17)	78 (65)	陳1993
吉林農安左家山 2 期 ○前 4 千年紀	62 %	5 (8)	0 (0)	3 (5)	1 (2)	10 (16)	43 (70)	陳1993
吉林農安左家山 3 期 ○前 3 千年紀前半	298 %	8 (3)	0 (0)	53 (18)	3 (1)	59 (20)	175 (58)	陳1993
內蒙古敖漢趙寶溝 ○前 5 千年紀後半	47* %	1 (2)	0 (0)	9 (19)	1 (2)	24 (51)	12 (26)	中國社科院考研1997
內蒙古涼城王墓山坡上 ●前 4 千年紀後半	11* %	0 (0)	0 (0)	4 (36)	2 (18)	3 (27)	2 (18)	內蒙古考研ほか1997
內蒙古伊金霍洛朱開溝 1 期 ●前 3 千年紀末	18* %	4 (22)	5 (28)	8 (44)	1 (6)	0 (0)	0 (0)	黃1996
內蒙古伊金霍洛朱開溝 2 期 ▲前 2 千年紀前半	135* %	19 (14)	50 (37)	42 (31)	6 (4)	14 (10)	4 (3)	黃1996
遼寧大連郭家村下層 ●前 3 千年紀前半	126 %	0 (0)	0 (0)	88 (70)	11 (9)	24 (19)	3 (2)	傅1984
遼寧大連郭家村上層 ●前 2 千年紀後半	207 %	0 (0)	0 (0)	116 (56)	8 (4)	70 (34)	13 (6)	傅1984
北京鎮江營・塔照 3 期 ●殷・西周	26* %	2 (8)	0 (0)	9 (35)	4 (15)	5 (19)	6 (23)	黃1999
北京鎮江營・塔照 4 期 ●西周・春秋初期	78* %	3 (4)	1 (1)	30 (38)	11 (14)	21 (27)	12 (15)	黃1999
河南滎池班村裴李岡文化 ●前 6 千年紀	34* %	0 (0)	0 (0)	19 (56)	2 (6)	11 (32)	2 (6)	袁1999 a
河南滎池班村仰韶文化 ●前 4 千年紀前半	31* %	0 (0)	0 (0)	27 (87)	1 (3)	3 (10)	0 (0)	袁1999 a
河南滎池班村廟底溝 2 期 ●前 3 千年紀前半	39* %	0 (0)	0 (0)	31 (79)	5 (13)	3 (8)	0 (0)	袁1999 a
河南鄭州二里岡 ■前 2 千年紀後半	1351 %	764 (57)	133 (9)	234 (17)	30 (2)	83 (6)	107 (8)	安1954
河南安陽洹北花園莊 ●前 2 千年紀後半	* %	(15)	(9)	(65)	(4)	(0)	(7)	中國社科院考研1998
河南安陽苗圃北地 ■前 2 千年紀後半	約1500 %	(65)	(9)	(15)	(10)	(5)	(1)	中國社科院考研1991
陝西臨潼白家村老官臺文化 ●前 6 千年紀	706 %	166 (23)	0 (0)	251 (36)	8 (1)	267 (38)	14 (2)	周1994
陝西臨潼姜寨 1 期 ○前 5 千年紀前半	209* %	3 (1)	0 (0)	85 (41)	2 (1)	93 (45)	26 (12)	西安半坡博ほか1988
陝西臨潼姜寨 2 期 ○前 5 千年紀後半	32* %	2 (6)	0 (0)	8 (25)	0 (0)	18 (56)	4 (13)	西安半坡博ほか1998
陝西臨潼姜寨 4 期 ○前 4 千年紀後半	68* %	0 (0)	0 (0)	12 (18)	2 (3)	41 (60)	13 (19)	西安半坡博ほか1988
陝西臨潼姜寨 5 期 ○前 3 千年紀後半	29* %	1 (3)	0 (0)	4 (14)	1 (3)	19 (66)	4 (14)	西安半坡博ほか1988
陝西商州紫荊老官臺文化 ○前 6 千年紀	29 %	0 (0)	0 (0)	4 (14)	2 (7)	23 (79)	0 (0)	王1991
陝西商州紫荊仰韶文化 ○前 5 千年紀	87 %	2 (2)	0 (0)	11 (13)	9 (10)	64 (74)	1 (1)	王1991
陝西商州紫荊仰韶文化 ○前 4 千年紀	122 %	4 (3)	0 (0)	38 (31)	7 (6)	73 (60)	0 (0)	王1991

遺 址	資料數	ウシ	ヒツジ	ブタ	イヌ	シカ	他	文 獻
陝西商州紫荊龍山文化 ●前3千年紀後半	80 %	12 (15)	0 (0)	48 (60)	1 (1)	7 (9)	12 (15)	王1991
陝西扶風案板 ●前3千年紀	81 %	5 (6)	0 (0)	42 (52)	2 (2)	25 (31)	7 (9)	傅1998
甘肅武山傅家門石嶺下類型 ●前4千年紀後半	24* %	2 (8)	5 (21)	12 (50)	2 (8)	1 (4)	2 (8)	袁1999 a
甘肅武山傅家門馬家窩類型 ●前3千年紀前半	22* %	2 (9)	4 (18)	11 (50)	2 (9)	0 (0)	3 (14)	袁1999 a
甘肅永靖大何莊齊家文化 ●前2千年紀前半	126 %	6 (5)	42 (33)	68 (54)	2 (2)	5 (4)	3 (2)	中國科學院考研1974
山東濰縣魯家口龍山文化 ●3千年紀後半	300 %	30 (10)	0 (0)	201 (67)	0 (0)	67 (22)	2 (1)	中國社科院ほか1985
山東泗水尹家城龍山文化 ○前3千年紀後半	191 %	1 (1)	1 (1)	57 (30)	5 (2)	125 (65)	2 (1)	山東大學1990
山東泗水尹家城岳石文化 ●前2千年紀前半	171 %	14 (8)	0 (0)	65 (38)	24 (14)	68 (40)	0 (0)	山東大學1990
山東泗水尹家城殷~漢代 ●前1千年紀	133 %	12 (9)	0 (0)	51 (38)	16 (12)	49 (37)	5 (4)	山東大學1990
山東兗州西吳寺龍山文化 ●前3千年紀後半	61 %	1 (2)	0 (0)	30 (49)	6 (10)	23 (38)	1 (2)	國家文物局1990
山東兗州西吳寺周代 ●前1千年紀	54 %	6 (11)	0 (0)	17 (31)	10 (19)	21 (39)	0 (0)	國家文物局1990
山東兗州六里井大汶口文化 ●前3千年紀前半	42 %	2 (5)	0 (0)	29 (69)	2 (5)	7 (16)	2 (5)	範1999
山東兗州六里井東周文化 ●前1千年紀	37 %	3 (8)	0 (0)	24 (65)	2 (5)	4 (11)	4 (11)	範1999
安徽濉溪石山子 ●前5千年紀	92* %	2 (2)	0 (0)	51 (55)	0 (0)	37 (40)	2 (2)	安徽考研1992
安徽蒙城尉遲寺大汶口文化 ●前3千年紀前半	127* %	2 (2)	0 (0)	67 (53)	7 (5)	45 (35)	6 (5)	袁1999 a
安徽蒙城尉遲寺龍山文化 ●前3千年紀後半	65* %	2 (3)	0 (0)	34 (52)	3 (5)	23 (35)	3 (5)	袁1999 a
江蘇沭陽萬北第1期 ●前5千年紀後半	147* %	0 (0)	0 (0)	127 (86)	3 (2)	17 (12)	0 (0)	李1991
江蘇沭陽萬北第2期 ●前4千年紀前半	78* %	0 (0)	0 (0)	51 (65)	1 (1)	26 (33)	0 (0)	李1991
江蘇高郵龍虬莊第1期 ●前5千年紀後半	36* %	0 (0)	0 (0)	21 (58)	2 (6)	13 (36)	0 (0)	李ほか1997
江蘇高郵龍虬莊第2期 ○前4千年紀前半	139* %	0 (0)	0 (0)	38 (27)	32 (23)	69 (50)	0 (0)	李ほか1997
江蘇常州圩墩下層 ○前5千年紀後半	32* %	2 (6)	0 (0)	9 (28)	0 (0)	18 (56)	3 (9)	黃1992
江蘇常州圩墩中層 ○前4千年紀前半	36* %	4 (11)	0 (0)	10 (28)	0 (0)	22 (61)	0 (0)	黃1992
江蘇吳江龍南第1期 ●前4千年紀後半	48 %	1 (2)	0 (0)	20 (42)	8 (17)	17 (35)	2 (4)	吳1991
江蘇吳江龍南第2期 ●前3千年紀前半	31 %	0 (0)	0 (0)	18 (58)	1 (3)	10 (32)	2 (6)	吳1991
江蘇吳江龍南第3期 ●前3千年紀後半	184 %	8 (4)	0 (0)	121 (66)	13 (7)	35 (19)	7 (4)	吳1991
上海崧澤崧澤文化 ○前4千年紀後半	177 %	0 (0)	0 (0)	51 (29)	3 (2)	123 (69)	0 (0)	黃ほか1987

遺 址	資料數	ウシ	ヒツジ	ブタ	イヌ	シカ	他	文 獻
上海馬橋良渚文化 ●前3千年紀	16* %	1 (6)	0 (0)	8 (50)	1 (6)	6 (38)	0 (0)	袁・宋1997
上海馬橋馬橋文化 ○前2千年紀	269* %	2 (1)	0 (0)	50 (18)	6 (2)	206 (77)	5 (2)	袁・宋1997
湖北黃梅塞墩薛家岡文化 ●前3千年紀	79* %	7 (9)	0 (0)	48 (61)	1 (1)	12 (15)	11 (14)	韓1994
湖北沙市周梁玉橋殷文化 ○前2千年紀後半	45* %	7 (16)	0 (0)	6 (13)	8 (18)	20 (44)	4 (9)	彭1990
福建閩侯曇石山 ●前3千年紀	63 %	2 (3)	0 (0)	26 (41)	8 (13)	24 (38)	3 (5)	祁1977

○は野獸優位型, ●はブタ優位型, ■はウシ優位型, ▲はヒツジ優位型の構成比を示す(次節参照)。

資料數の*は最小個體數の計測法による。

のデータに拘泥することなく、できるだけ類例を蓄積して妥當な傾向性を把握することに努めたい。

2 類型の設定

甲元眞之は、紀元前三千年紀の生業として、稻作栽培と狩獵・漁撈を中心として家畜飼育に比重をかけない選別的な類型の長江流域、アワをはじめとする多様な雜穀栽培と多種にわたる家畜の飼育と狩獵・漁撈をおこなう多角的な類型の黃河流域、狩獵・漁撈・採集といった自然依存の經濟を根底に、補助的に各種の穀物栽培と家畜飼育をおこなう網羅的な類型の東北アジア、という三類型に區分している〔甲元一九九二〕。いっぽう、袁靖は野生動物と家畜との比率をもとに、野生動物の狩獵に完全に依存する依賴型、狩獵とともに家畜飼育をおこなう初級開發型、主たる肉資源を家畜に求める開發型に類型化し、地域ごとに進化の速度がちがうものの、すべての地域で開發型への家畜化が進行したものと考えている〔袁一九九九a〕。家畜の増加現象は新石器時代についてはおおむね妥當なところであるが、それにつづく紀元前二千年紀になると、状況が大きく變化する。ここでは中國文明の形成期にあたる前三千年紀から前二千年紀の變化に着目した類型化を試みてみよう。すなわち、前節にあげた遺址出土動物骨の集成表をもとに、野生／家畜の二項對立ではなく、草食性のウシ・ヒツジや雜食性のブタ・イ

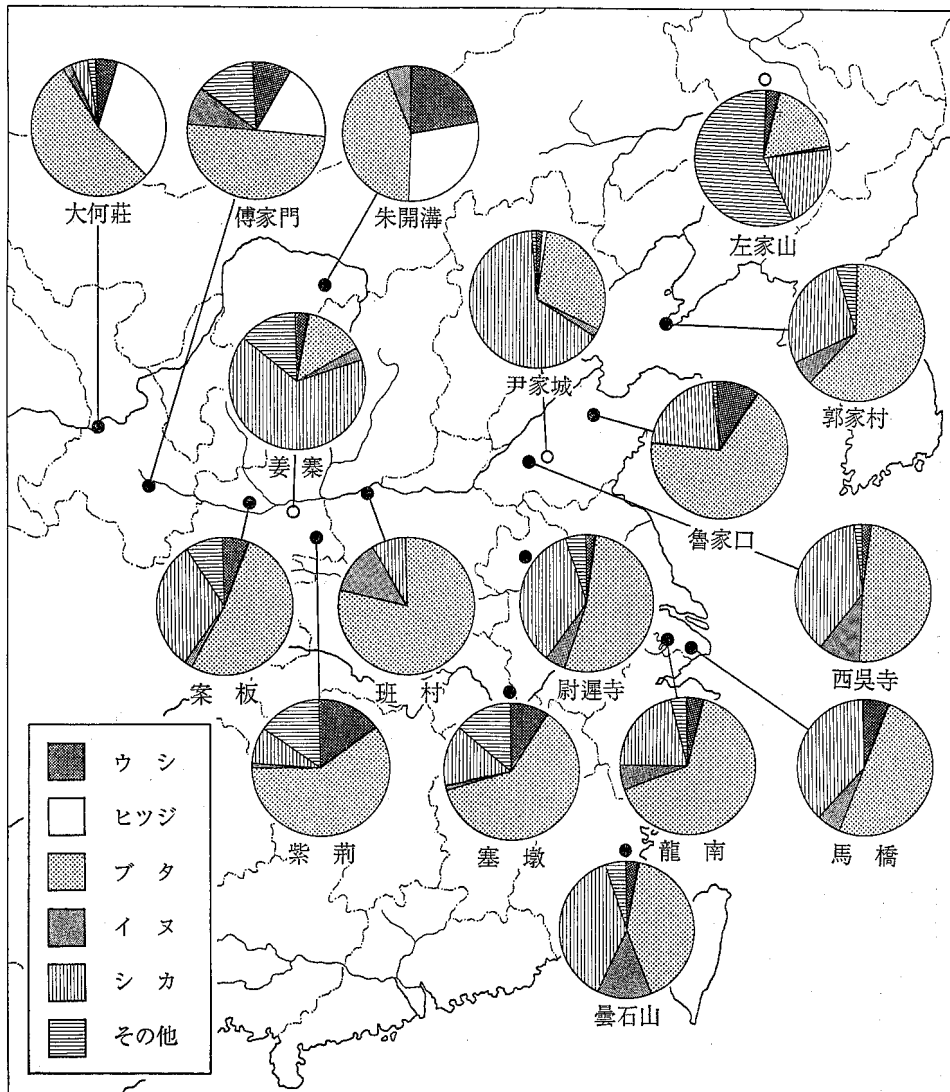


圖1 紀元前3千年紀の動物骨構成比 (○野獸優位型, ●ブタ優位型)

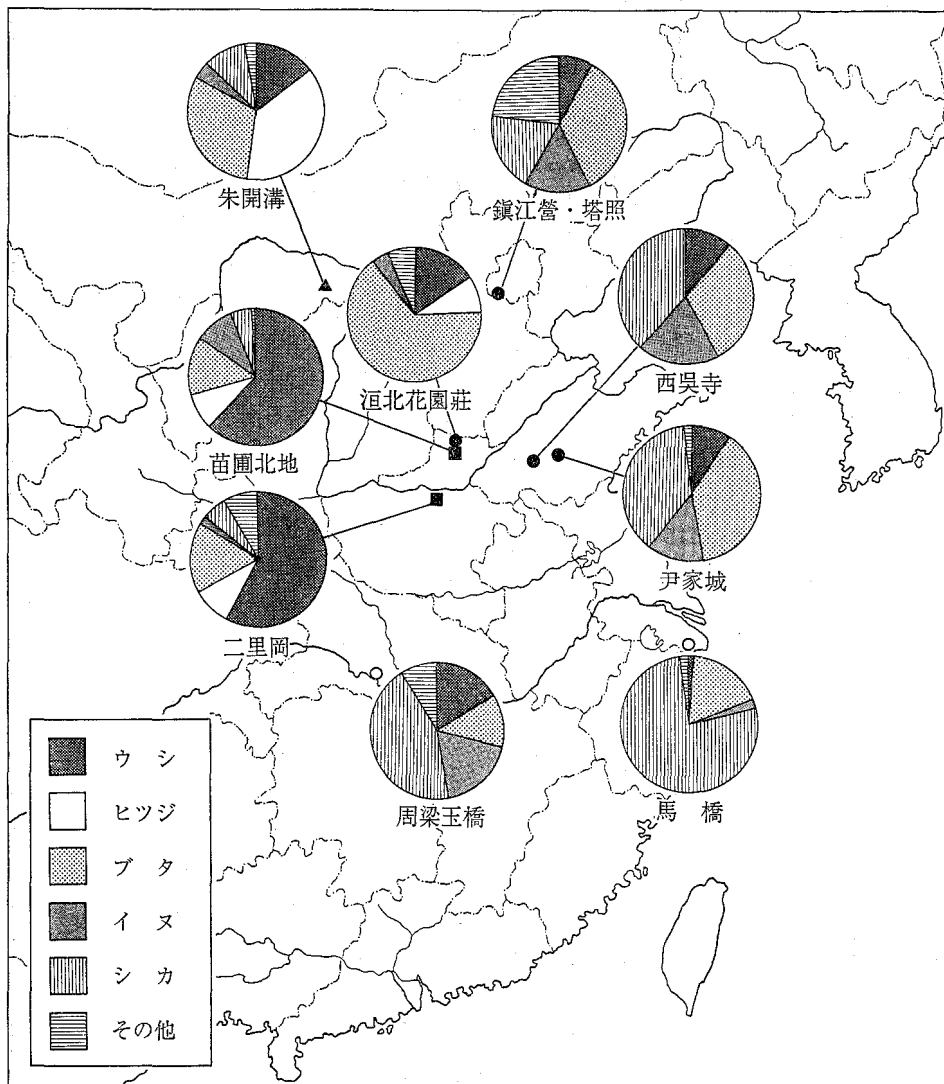


図2 紀元前2千年紀の動物骨構成比
(■ウシ優位型, ▲ヒツジ優位型, ●ブタ優位型, ○シカ優位型)

ヌなど、飼育形態の異なる家畜それぞれの構成比をみることによって、廣大な中國大陸における哺乳動物の消費と畜産の地域性を明らかにするとともに、牛・羊・豕という禮的な等級制度がいつ、どこで形成されたのかを検討する。構成比の明らかな遺址は、前三千年紀（圖1）では計一七遺址、前二千年紀（圖2）では計九遺址を數え、前三千年紀の遼寧省大連市郭家村・安徽省蒙城縣尉遲寺・江蘇省吳江縣龍南遺址、前二千年紀の內蒙古伊金霍洛旗朱開溝・山東省泗水縣尹家城遺址では層位別の統計をひとまとめにしている。

まず、ウシ・ヒツジ・ブタ・イヌを家畜、シカとその他を野生動物とすると、野生動物が五〇%以上を占める野獸優位型と家畜が五〇%以上を占める家畜優位型とに大別することができる。野獸優位型における野生動物の比率は、前三千年紀前半の吉林省農安縣左家山遺址（左家山第三期）が七八%、前三千年紀後半の山東省泗水縣尹家城遺址（龍山文化）が六六%、陝西省臨潼縣姜寨遺址（姜寨第五期／客省莊第二期文化）が八〇%、前二千年紀前半の上海市馬橋遺址（馬橋文化）が七九%、前二千年紀後半の湖北省沙市市周梁玉橋遺址（殷後期）が五三%である。このうち松花江流域に位置する吉林省左家山遺址は、舊石器時代からの狩獵・漁撈・採集に比重をおいた網羅的な生業地域に屬し、さまざまな野生動物が狩獵對象になっているのにたいして、黄河と長江の中・下流域に位置するのこりの四遺址は、家畜優位型が多い地域に屬し、野生動物のなかではシカ科の比率が壓倒的に多いことが特徴である。これは地域性によるちがいであり、黄河・長江流域のシカに特化した選別的な狩獵と中國東北部にみるシカ以外の野生動物も多い網羅的な狩獵とに細別することができる。前者をシカ優位型、後者を網羅的野獸優位型と呼ぶことにする。

つぎに、家畜優位型としたものを、比率のもっとも高い家畜をもとに、ウシ優位型、ヒツジ優位型、ブタ優位型に細分する。ウシ優位型は、前二千年紀後半の河南省鄭州市二里岡遺址と河南省安陽市殷墟苗圃北地遺址の二例があり、ウシはそれぞれ五七%と六五%と過半数を占める。兩遺址とも殷代の王都の一角にあり、都市的な消費類型を示すものであろう。

ヒツジ優位型は、前二千年紀前半の内蒙古自治区伊金霍洛旗朱開溝遺址（朱開溝第二、四段）の一遺址のみであり、ヒツジは三七％を占める。オルドス高原に位置するこの遺址では、龍山文化末期（朱開溝第一期）ではブタ優位型であったが、つづく二里頭時代にヒツジ優位型に轉換している。前三千年紀の甘肅省武山縣傅家門遺址（馬家窖文化）や甘肅省永靖縣大何莊遺址（齊家文化）ではブタが五〇～五四％に達するものの、ヒツジが一八～三三％を占め、中國西北部では前三千年紀ごろから草食性のウシ科（ウシ・ヒツジ・ヤギなど）を中心とする牧畜へと少しずつ傾斜していったことがうかがえる。ブタ優位型は、前三千年紀に北は遼寧省大連市郭家村・內蒙古自治區伊金霍洛旗朱開溝遺址から南は福建省閩侯縣曇石山遺址までの一六遺址、前二千年紀に河南省安陽市洹北花園莊遺址や北京市房山區鎮江營・塔照遺址、山東省兗州市西吳寺・泗水縣尹家城遺址の四遺址を數え、動物骨の定量分析がおこなわれた遺址のなかで最多の類型である。しかも、黃河中流域では遅くとも前六千年紀の河南省滎陽縣班村遺址や陝西省臨潼縣白家村遺址など、長江下流域では前五千年紀の江蘇省高郵縣龍虬莊遺址などでブタ優位型が出現し、黃河流域と長江流域にある多くの遺址がブタ優位型に屬しているのは、栽培穀物によって黃河／長江を對比的にとらえていた從來の見方からすれば、意外な事實であろう。つぎにそれを詳しく検討してみよう。

3 ブタ優位型農耕文化のひろがり

紀元前一〇〇〇年ごろ、氷河期の終焉とともに、狩獵・漁撈・採集に依存する生業に變化があらわれる。比較的冷涼な東北アジアでは、日本列島と同じように、氷河期の終焉に前後して土器が出現するけれども穀物栽培や家畜飼養のはじまりは遅れ、新石器時代では野獸優位型の遺址がほとんどであった。しかし、野獸優位型のなかでも時期や地域による變異があり、北に位置する吉林・黑龍江では網羅的野獸優位型、南の遼河流域に位置する內蒙古東部ではシカ優位型となる

(表1参照)。前者からみると、松花江流域に位置する吉林省農安縣左家山遺址では、前五千年紀から前三千年紀にかけての三時期の動物相が明らかにされ、野生動物は七八～八六%と約二〇〇〇年間の時間的變化が小さい。その内譯は、シカ科が一六～二〇%、イノシシが三～一九%のほか、キツネ(狐狸)やトラ(虎)などの森林性の動物がある。いっぽうシカ優位型をみると、遼河流域にある前五千年紀の內蒙古自治區敖漢旗趙寶溝遺址では、野生動物の比率は七七%と高く、シカ科は全體の五一%を占める。年齢構成をもとに母集團の全體が家畜種と判別されたブタ(一九%)は、骨の形質からみるとイノシシにかなり近いとされるから、その飼養はまだ初期の段階にあったことがわかる〔中國社科院考研一九九七〕。前四千年紀の內蒙古自治區巴林左旗富河遺址でも、出土動物骨のほとんどが野生種で、そのうちシカ科が半數前後、イノシシが一七%、アナグマが九%である〔徐一九八四〕。遼河流域におけるその後の變化については、精確な分析の報告がないため詳しいことはわからないが、前二千年紀の夏家店下層文化においてシカの減少とヒツジやウシの増加がうかがわれ、森林環境から草原環境への生態系の變動が想定されている〔大貫一九九五〕。もっとも夏家店下層文化の中心的な城郭聚落である內蒙古自治區敖漢旗大甸子遺址では、一六六基の墓からブタやイヌの骨が出土し〔中國社科院考研一九九六〕、雑食性家畜の盛んな飼養がうかがえる。また、前二千年紀の高臺山文化を主體とする遼寧省彰武縣平安堡遺址では、ブタとイヌの出土がもっとも多く〔傳一九九二〕、ブタの年齢構成からみると、そのほとんどは家畜と考えられる。したがって、前四千年紀の紅山文化以後、黃河流域との交流を深めていくなかで、家畜飼養の比重がしだいに高まり、ブタ優位型の定住的な農耕村落がひろがっていったものと推測される。

氣候の高溫多濕化にともなつて、黃河流域では前六千年紀までにアワをはじめとする本格的な雜穀農業が、長江流域では前五千年紀までに人工的な水田施設による集約的稻作が開始される〔岡村一九九八〕。安定した食糧生産が確保されることによって、自然に依存する狩獵・漁撈・採集の比重はしだいに低下し、野獸優位型からブタ優位型へと消費の動物相

がゆるやかに移行する。ただし、家畜の飼養にはその飼料をいかに調達するかという問題があり、とくに雑食性のブタやイヌの飼料は人間の食糧とも重なるところが大きいため、森林や河川などの自然資源に恵まれ、亂獲などがなければ、動物性タンパク質の供給を狩獵・漁撈に依存するほうが経済的である。そのため、本格的な家畜飼養に移行してからも狩獵・漁撈はつづけられ、黄河中・下流域や長江流域ではシカ優位型の遺址が依然としていくつか存在していた。また、ブタ優位型の遺址でも、野生動物のなかではシカ科を選別的に狩獵するのがふつうであった。要するに、黄河・長江流域ではブタの飼育とシカの狩獵を基本とし、遺址周辺における自然資源の多寡によって兩者のバランスが決定されたといえるだろう。それを地域ごとに詳しくみてみよう。

黄河中流域の河南省滎池縣班村遺址では、前六千年紀の裴李岡文化においてすでにブタは五六%を占め、時期が下るにつれてその比率は七九〇八七%に増加し、反對に狩獵對象のシカは三二%から八%まで減少している。黄河南岸の黃土臺地に位置する班村遺址の周邊では、シカの生息に適した森林がしだいに失われ、人びとはブタの飼養に比重を移していったのであろう。いっぽう、關中盆地にある前六千年紀の陝西省臨潼縣白家村遺址では、ブタ三六%、シカ三八%、前五千年紀の陝西省臨潼縣姜寨遺址第一期でも、ブタ四一%、シカ四五%というようにブタとシカは拮抗するが、姜寨遺址の第二期から第五期へと時期が下るにつれてブタは一四%まで減少し、反對にシカは六六%までしだいに増加している。また、長江支流の丹江流域になるが、陝西省商州市紫荊遺址では、シカは前六千年紀の七九%から前四千年紀に六〇%まで減少をみせながらも、長期にわたってシカ優位型を維持していた。このように秦嶺山脈の南北では豊かな森林性の環境が保全され、シカの狩獵に比重をおいた生業が長期にわたって安定的に存続したのである。

山東南部から淮河にかけての地域では、前五千年紀から漢代までブタ優位型が卓越し、ブタの飼育とシカの狩獵を主體とする傾向は基本的に不變であり、ヒツジがほとんどないことも特徴的である(圖3)。前五千年紀の江蘇省流陽縣萬北

遺址ではブタが八六%に達し、總じてみれば、早い時期ほどブタの比率が高く、時代が下るにつれてウシとイヌが微増し、ブタとシカがやや減少する傾向にある。もっとも、それは生態系の變動による變化ではなく、むしろブタの飼育とシカの狩獵を主體とするブタ優位型の雜穀農耕が漢代まで長期にわたって安定的に繼續したことを重視すべきであろう。この地域で唯一のシカ優位型となる龍山文化の山東省泗水縣尹家城遺址では、棺・槨をもち、ブタ下顎骨をふくむ多數の副葬品をいれた大型墓も發見されているから、シカ優位型／ブタ優位型という基準で遺址の優劣をきめることはできない。シ

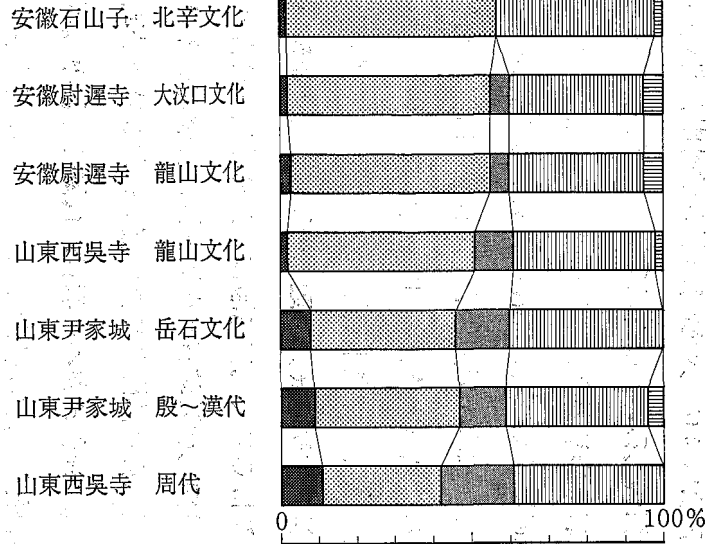


圖3 山東南部・淮河流域の動物骨構成比
(凡例は圖1・圖2と同じ)

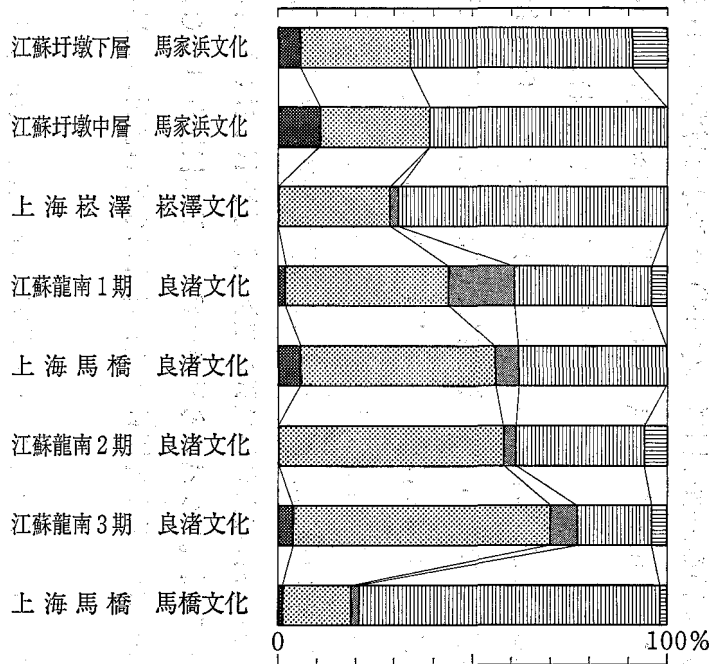


圖4 江南の動物骨構成比

カとブタとの比率は自然環境などの條件によって互換的に變動するからである。また、前二千年紀の岳石文化以降、尹家城遺址と西吳寺遺址ではイヌが一二～一九%を占めるのは、それが食用にされたことを暗示し、犬は豫州・青州・兗州・并州に産するという『周禮』職方氏の記録を裏づけている。

山東省兗州市六里井遺址は、脱稿後に報告されたために圖3には掲載できなかったが、大汶口文化と東周文化の二時期の動物構成比が明らかにされ(表1)、ブタ六九～六五%、シカ一六～一一%、ウシ五～八%、イヌ五%で〔範一九九九〕、二〇〇〇年間の時期的變化がほとんど認められない。尹家城遺址や西吳寺遺址と比べると、ブタが多く、シカが少ないけれども、それは六里井遺址が平地環境にあるからだろう。また、華北平原の西北隅、拒馬河の兩岸に位置する北京市房山區鎮江營・塔照遺址は殷後期から西周代を中心とする聚落遺址であり、最小個體數による標本數の多い殷後期から西周中期(商周第三期)と西周中・後期から春秋前期(商周第四期)との二時期について哺乳動物骨の比率をみると、ブタは三五～三八%、シカは一九～二七%、シカ以外の野生動物は二三～一五%、イヌは一五～一四%、ウシは八～四%である。遺址のすぐ近くまで太行山脈がせまる環境のため、オオカミ・トラ・クマ・アナグマなどの野生動物が比較的多い〔黄一九九九〕。しかし、家畜のウシ・ヒツジ・ブタ・イヌは、それぞれ同時期の尹家城遺址や西吳寺遺址の構成比に類似し、典型的なブタ優位型とみることができる。このように華北平原の雜穀農耕に經濟基盤をおく村落は、新石器時代から殷周時代を通じてブタ優位型が普遍的であり、時代による大きな變動はなかったと考えられる。

長江流域では、前五千年紀の江蘇省高郵縣龍虬莊遺址などでブタ優位型が出現しているが、すべての遺址でシカの比率も高く、陝西南部と同じようにブタ優位型とシカ優位型が混在している。ヒツジは報告例がなく、ウシの多くはスイギユウで、その比率の低さからみて野生種の可能性が高い。江南に位置する四遺址について年代順にならべると(圖4)、前五千年紀から前三千年紀へと時期が下るにつれてブタの比率が二八%から六六%へとしだいに増加し、反對にシカは五六

%から一九%へと減少する傾向がみられる。とくに崧澤文化から良渚文化への變化が大きく、前三千年紀にはすべての遺址がブタ優位型となっている。江蘇省吳江縣龍南遺址は良渚文化のごく一般的な村落だが、ブタが五八%を占めた龍南第二期では、半地穴式の一號住居址の周邊に六基のブタ犠牲坑が分布し「蘇州博ほか一九九〇」、ブタ飼養がひろく盛行していたことをうかがわせる。ところが前二千年紀になると、長江中・下流域ではブタとシカの比率が逆轉し、シカ優位型に轉換する。馬橋文化の上海市馬橋遺址では、ブタ一八%にたいしてシカは七七%と高率であり、長江中流域の湖北省沙市市周梁玉橋遺址でも、ブタ一三%にたいしてシカは四四%と三倍あまりを占める。周梁玉橋遺址では、イヌが一八%、スイギュウが一六%を占めてブタよりも多く、スイギュウを家畜とみなしても、家畜は全體の半分に満たない。わずかに二遺址の事例でシカ優位型への逆轉を説くのはいささか危険であるかもしれないが、兩遺址とも最小個體數による統計で、馬橋遺址は計二六九個體、周梁玉橋遺址は計四五個體を數えるから、その數値は統計學的には信頼できる。しかも、シカとブタとの比率は環境などの自然條件によって互換的に變動する可能性があり、また後述のように『周禮』職方氏には揚州と荊州は「其の畜は鳥獸に宜し」と、家畜がなくて野生動物に依存していることを記し、『史記』貨殖列傳の記錄では「楚越の地は、地廣く人希にして、稻を飯にし、魚を羹にす」と、漢代には稻作・漁撈中心の典型的な「魚米之郷」的生活であったことからみれば、前二千年紀を境に、家畜の比重を減らして動物性タンパク質の供給を狩獵・漁撈に依存するようになった可能性が高い。すでに甲元眞之が指摘しているように、世界的にみると、飼料を大量に必要とする家畜は穀物栽培の進展と反比例し、とくに長江流域の稻作農業地帯では、水田稻作の集約化とともに負擔の大きな畜産を放棄し、漁撈・採集とニホンシカを主とする野生動物の狩獵を選別的にこなうようになったと考えられる。長江流域で再び家畜が多く飼養されるようになるのは、その糞尿を肥料として水田に投入することで生産性を高める漢代以降のことである〔甲元一九九二〕。

黃河流域のアヲを主とする雜穀農業地帶も、長江流域の水稻農業地帶も、新石器時代ではブタの飼育とシカの狩獵を中心とし、とくに前三千年紀の龍山時代には、ほとんどの遺址がブタ優位型となった。これは中國新石器時代における食肉消費はかなり齊一的であったことを示している。ところが、殷周王朝が誕生する前二千年紀になると、華北の農耕村落では従前からのブタ優位型を維持しているものの、長江流域では家畜生産よりも自然資源に依存する方向、つまりブタ優位型からシカ優位型へと轉換していった。これが前二千年紀における大きな變化のひとつである。同じころ、王朝搖籃の地では別の變化がおきていた。つぎにそれを見てみよう。

4 ウシ優位型都市文化の出現

前二千年紀の中原では、二里頭文化、二里岡（殷前期）文化、殷墟（殷後期）文化、西周文化が繼起した。二里岡文化の指標となった河南省鄭州市二里岡遺址では、一九五二年秋の調査で殷代層から多數の哺乳動物骨が出土し、鑑定された一三五一點を比率の高い順にみると、ウシ五七%、ブタ一七%、ヒツジ九%、シカ六%、イヌ二%である〔安一九五四〕。ウシが過半を占めるウシ優位型の構成で、シカをはじめとする野生動物が少ないことが特徴である。鄭州は殷前期の王都のひとつで、一八七〇×一七〇〇mの長方形の城壁（内城）に囲まれた東北部分に宮殿が集中し、内城外には青銅器・土器・骨器などの製作址や墓地が分布している。この手工業區や墓地を圍む外城郭は、南面と西面の一部が発見され、二里岡遺址の一九五二年の發掘區は、鄭州城の東南、外城郭のすぐ内側に位置している。二里岡遺址では、灰坑が多く分布しているほかは顯著な遺構が発見されておらず、外城郭内の一般居住區であった可能性が高い。しかし、ウシを主とする家畜がひじょうに多く、シカなどの野生動物の比率が少ない構成は、前節にみたブタ優位型の農耕村落とは明らかにちがっており、都市的な消費のあり方を示すものであらう。

脱稿後に報告された鄭州市南順城街窖藏坑は、内城のすぐ外側に位置し、四六m²の小規模な發掘によって、ブタ三、ウシ・ヒツジ・イヌ各一の最小個體數が明らかになっている〔袁一九九九b〕。發掘面積の制約により資料數が少ないけれども、野生動物骨がまったく出土していないことは、二里岡遺址と共通する。

殷後期のみやこ河南省安陽市殷墟の苗圃北地遺址では、一九八二年から一九八四年の調査で一五〇〇點あまりの動物骨が出土し、種類ごとの比率が明らかにされている。それを比率の高い順にみると、ウシ六五%、ブタ一五%、イヌ一〇%、ヒツジ九%、シカ五%で〔中國社科院考研一九九一〕、ウシが過半を占めるウシ優位型の構成である。先行する二里岡遺址と比べると、ウシとイヌが増加し、ヒツジは横ばい、シカは減少しているが、兩遺址はかなり近似した構成といふべきであろう。苗圃北地遺址は、王宮ないしは宗廟と考えられる小屯から東南約一kmにあり、墓や土器窯のほか、殷墟一期から四期までの地層・灰坑から青銅器の鑄型・骨器の材料・卜用の甲骨などが大量に出土し、青銅器や骨器の製作工房が集中する手工業區と考えられる⁷⁾。出土した骨器の材料には鋸で切斷した痕跡があり、報告ではこれを骨素材として骨器にくめているため、比率の算出された動物骨は食用に消費され、廢棄されたものとみなしてよいだろう。

また、小屯の南に位置する花園莊南地遺址では、殷墟三期から四期にかけての長徑三九mの大きな灰坑H二七から三〇〇〇〇點近い動物骨が出土し、その九八%以上がウシで、ほかにブタ・イヌ・ヒトの骨やシカの角があった。とくにその骨の多くは、骨器の製作には不向きなウシの頭骨・下顎骨・齒・脊椎骨・肋骨・大腿骨などであり、破砕されたものが多く、鋸で切斷した痕跡をもつ骨器未製品はきわめて少ないことから、犠牲を屠殺・解體したり、卜用の肩胛骨を採取した後には不用の骨を廢棄した坑と報告者は推測している〔中國社科院考研一九九二〕。この花園莊南地は小屯の王宮・宗廟區を區畫する大溝の内側に位置し、王室に近い集團の遺址と考えられるから、ウシの比率がひじょうに高い理由もそこに求められるであろう。このように殷後期のみやこ殷墟ではウシが過半を占め、シカなどの野生動物がきわめて少ないウシ

優位型となり、王宮に近いほどウシの比率が高いことがわかる。

ところが、殷墟のなかで洹河の北に位置する洹北花園莊遺址では、わずか一三六m²の小規模な發掘だが、出土動物骨の最小個體數の分析によってブタ六五%、ウシ一五%、ヒツジ九%、イヌ四%、サイ三%という値が示されている〔中國社科院考研一九九八〕。シカなどの野生動物がきわめて少ないことは鄭州二里岡や殷墟のほかの事例と共通するが、ウシとブタの比率が逆轉し、ブタが過半を占めるブタ優位型であるところが相違している。この一帯では殷墟一期（大司空村一期）より古い段階の墓や青銅器窖藏が分布し、洹北花園莊遺址は出土土器をもとに二里岡文化末期（白家莊期）から大司空村一期への過渡期にあたる時期に比定されている。とくに、一九九八年の調査で大型版築基址が發見されたことにより、盤庚が殷に遷都した段階の王都の可能性が浮上し〔唐・徐一九九九〕、その當否は今後の調査にゆだねるとしても、殷墟に王都を建設する直前か直後の都市遺址であることはまちがいない。

統計データが不完全なために表1にはあげなかったが、殷墟ではまた、一〇〇〇年ほどさかのぼる中原龍山文化の後岡遺址において、ブタが六二%、ニホンシカが二四%と報告されている〔中國社科院考研一九八五〕。後岡遺址では聚落を防禦する龍山時代の城郭も發見されているが、出土した住居址や遺物は一般の農耕村落と大差なく、ブタを主とする畜産とともに狩獵・漁撈もおこなっていた。いっぽう、黄河の南にある河南省滎陽市豎河遺址では、龍山時代にはブタが半數近くを占め、ついでウシ、ヒツジがあり、イヌは比較的少なく、シカやイノシシなどの野生動物はひじょうに少なかったが、二里頭時代には、ブタ、ウシ、ヒツジが多いという〔河南省文研一九九六〕。同じように黃土臺地上に位置する河南省渾池縣班村遺址でも、前三千年紀前半にはシカなどの野生動物は八%まで減少し、遺址の周邊にニホンシカの生息するような森林が少なかったことがわかっている。したがって、河南西部の黃土臺地上では森林性の野生動物が減少するかわりに、前三千年紀後半ごろからウシやヒツジが少しずつ増加していったことがわかる。

以上のような河南省の龍山時代から殷代までの遺址を通観すると、動物相の變化の背景として、まず生態系の變動が想定できる。龍山時代には後岡遺址の周邊に森林性のニホンシカなどが生息していたが、一〇〇〇年ほど経過した殷代になると、鄭州や安陽の各遺址におけるシカの比率は〇～六%まで低下している。その反面、草原性のウシやヒツジが増加し、ヒツジは鄭州二里岡・殷墟苗圃北地・洹北花園莊の三遺址で等しく九%の比率があることから、華北平原における鄭州や安陽の王都の周邊では、森林環境から草原環境へと生態系がゆるやかに遷移したという想定が可能である。しかし、鄭州二里岡と殷墟苗圃北地・花園莊南地ではウシ優位型であるのにたいして、時期も地域も近接する洹北花園莊ではブタ優位型となっている理由は、こうした生態學的な觀點からでは説明できない。結論からいうと、殷人は大家畜のウシに特化した飼養をおこない、牛・羊・豕という犠牲動物の等級を創出したため、殷周時代の禮制ではウシ／ブタと社會身分の上／下とが相關し、王宮に近い殷墟花園莊南地ではウシの比率が九八%以上を占めるのにたいして、手工業區の殷墟苗圃北地や外城郭内の鄭州二里岡ではそれが五七～六五%と低くなっているのは、都市居住者の社會身分によって居住地と消費される食肉の種類が異なったからと考えられる。この推論が妥當であるならば、ブタ優位型の洹北花園莊は「盤庚遷殷」の王宮とみる説は再考の餘地がある。その解決は將來にゆだねるとしても、ここではつぎのことに注意しておきたい。ひとつは、殷の王都である鄭州と殷墟からは桁ちがいに莫大な量の動物骨が出土し、その大半が家畜であるという事實である。このことは王都で消費される食肉は基本的に外部の畜産に依存し、西周金文や禮書にいう「牧」に相當する、動物の大量消費を支える畜産システムが完成していたことを推測させる。野生動物と家畜をふくめて自給自足を基本とする農耕村落から、食肉のほとんどを外部に依存し、それをもっぱら消費する都市が分離したことは、古代都市論の上で重要な論點となるだろう。もうひとつは、殷墟出土の甲骨卜辭によると、鹿・麋・豕などの野生動物を狩獵對象とした殷王の田獵地は一五〇ヶ所を下らないといわれるが、そのほとんどは安陽から一日で往復できる距離、およそ安陽から半径二〇kmの

内におさまると考えられている〔松丸 一九六三〕。鹿と麋はシカ科、豕はイノシシと解釋できるから、そうした野生動物の生息する森林が殷墟の周邊に多數存在したことになり、殷墟出土の動物骨からみた生態系の復元とは矛盾する。もっとも、野生動物を祭祀の犠牲とした殷墟卜辭の例はひじょうに少ないから〔張 一九六八〕、田獵の性格やその獲物の利用などの問題もふくめて、それは甲骨學と動物考古學の今後の検討課題としなければならない。

5 ヒツジ優位型牧畜文化の形成

中國での家畜ヒツジの起源についてはよくわからないが、考古資料からみると、ブタより後出することは確かである〔横田 一九八三〕。前四千年紀ごろから中國西北部の黄土高原地帯を中心に家畜ヒツジがあらわれ、前三千年紀には華北平原までひろがりをみせるようになる。上述のように前二千年紀の鄭州や殷墟では哺乳動物骨の九%を占めるが、同時期の山東や長江流域ではほとんど出土例がなく、総じてみれば西北にいくほど比率が高くなる傾向がみられる。

ヒツジが多く出土している中國西北部の三遺址について、年代順に哺乳動物骨の構成比をみたのが圖5である。渭河流域に位置する前四千年紀後半から前三千年紀前半の甘肅省武山縣傅家門遺址では、二時期のデータが報告されているが、ブタがともに五〇%でもっとも多く、ついでヒツジが一八・二一%、ウシとイヌがともに八・九%、野生動物が一二・一四%である。野生動物には森林性のタケネズミ（竹鼠）やニホンシカがあるが、その数は少ない。前三千年紀から前二千年紀の甘肅省永靖縣大何莊遺址では、下顎骨と角による不完全な統計だが、居住區から出土したものだけでみると、ブタが五四%、ついでヒツジが三三%を占め、シカなどの野生動物はわずか六%である。このほか、ブタやヒツジの下顎骨を副葬した墓があり、その総計はブタが一二・六點、ヒツジが一四點である。また、齊家文化の住居址や墓のほか、卜骨やウシ・ヒツジの犠牲をともなう祭祀遺構が発見されている。

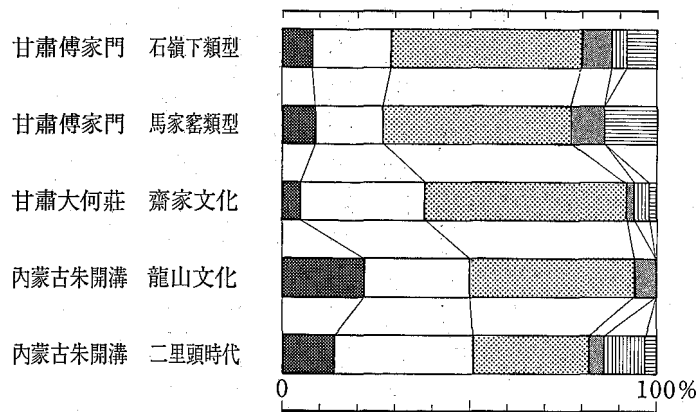


圖5 中國西北部の動物骨構成比（凡例は圖1・圖2と同じ）

渭河流域に位置する甘肅省天水市師趙村・西山坪遺址では、動物骨それぞれの構成比は明らかにされていないものの、前三千年紀のなかでブタの飼育に大きな変化がみられるという。すなわち、ブタの比率は、師趙村遺址で馬家窑文化の七四%から齊家文化の八五%へ、西山坪遺址で馬家窑文化の四九%から齊家文化の八二%へと増加するとともに、ブタの骨が細く、小さく、脆くなっている。この形質變化は、舍飼などによる運動不足、近親繁殖、屠殺年齢の低下などに原因があり、ブタ飼養の發展を意味するものと理解されている。また、ヒツジは前三千年紀前半の馬家窑文化まで出土例がなく、齊家文化にはじめて出現するといわれている〔周一九九九〕。このように、甘肅新石器文化の遺址はすべて中國農耕村落に一般的なブタ優位型に属している。しかし、傅家門遺址や大何莊遺址の構成比を他地域と比べると、ヒツジの比率が高く、シカなどの野生動物がいちじるしく少ないのが特徴であり、食肉の大部分を畜産に依存していたことがわかる。

霍洛旗朱開溝遺址は、龍山時代の末期（朱開溝第一段）、二里頭時代（朱開溝第二・四段）、殷代（朱開溝第五段）の三期に大別され、殷代の動物骨は四個體と少ないので捨象し、龍山時代と二里頭時代の二時期について地層と灰坑から出土した動物骨をみると、ブタは四四%から三一%に減少するのたいて、ヒツジは二八%から三七%に増加し、ブタと首位の座を交替している。最小個體數で一三五個體を數え、統計的に信頼できる二里頭時代をみると、それはヒツジの比率がもっとも高いヒツジ優位型に區分できるが、同じ草食性のウシは一四%で、森林性のクマ（熊）・ヒョウ（豹）・マンシ

ユウアカシカ（馬鹿）・ノロ（麋）などの野生動物は一三％である。野生動物が少なく、草食性のヒツジ・ウシと雜食性のブタが多いことは、甘肅の新石器時代と同じ特徴である。黃蘊平の分析によると、ブタは犬齒の形態によってオス／メスの判別が可能で、ここではメス七一％にたいしてオスは二九％と少なく、しかもメスと判定されたブタの多くは未成年であるという。安定かつ效率的な畜産のために、メスは繁殖供用が可能な五、六歳まで飼育するのにたいして、種つけ以外のオスは成長とともに屠殺するのがふつうだから、これは去勢によってオスがメス化した結果と考えられる〔黃一九九六〕。朱開溝遺址ではまた、ヒツジやブタの下顎骨を副葬した墓があり、二里頭時代の三〇二四號墓（朱開溝第三段）では、ヒツジとブタがそれぞれ六對あったほか、野獸の下顎骨も八對出土している。石鎌や石庖丁などの收穫具も出土し、穀物栽培も盛んにおこなわれていたことがわかる〔內蒙古考研 一九八八〕。

以上のように中國西北部の黃土高原地帯では、家畜のブタ・ヒツジ・ウシが多く、狩獵對象の野生動物が少ないという特徴がある。これは遺址の周邊にシカの生息する森林が少なく、ヒツジやウシの適應する草原環境であったことを示唆し、人びとは食肉の供給を家畜に多く依存していたことがわかる。青海東部の花粉分析や土壤學的調査によれば、前五千年紀から前二千年紀中ごろまでは溫暖な氣候で、草原ないしは疎林草原がひろがっていたが、前二千年紀中ごろから乾燥・冷涼化によって木本花粉が激減し、年平均氣溫は現在よりも、一、二度低かったという〔潘・徐 一九八九〕。前三千年紀より時期が下るにつれてヒツジの比率が増加していることは、この氣候の變化にともなうて草原環境へと生態系がゆるやかに遷移し、人びとは前二千年紀のなかで雜穀栽培・ブタ飼養を中心とする農業からヒツジ優位型の農耕經濟をへて最終的に草食性のヒツジ・ウシ・ウマの飼養を中心とする牧畜經濟へとじょじょに轉換していったと考えられる。このプロセスを別の資料を用いてもう少し細かく検討してみよう。

前二千年紀の中國西北部では、墓に家畜の肉や骨を副葬する風習がひろがっている。齊家文化の大有莊遺址では、ブタ

とヒツジの下顎骨が墓に副葬され、なかでもブタが多かった。大何荘に近い甘肅省永靖縣秦魏家遺址では、四六基の墓から合計四三九點のブタ下顎骨が出土し〔中國科學院考研一九七五〕、同じ齊家文化の甘肅省武威市皇娘娘臺遺址では、一四基の墓から合計三四點のブタ下顎骨が出土したほか、六三號墓からはヒツジの頭骨が出土した〔甘肅省博一九七八〕。また、齊家文化に併行する河西回廊の四壩文化では、甘肅省民樂縣東灰山墓地から動物骨が出土している。下顎骨のほかに肩胛骨や寛骨などをふくむのが特徴で、墓の數でみると、ブタが一三基でもっとも多く、ついでシカが一一基、ヒツジが三基、イヌが一基である〔甘肅省考研ほか一九九八〕。ブタの多いことは齊家文化と共通するが、狩獵對象のシカの多いことは意外な結果である。東灰山遺址の花粉分析によると、九八%以上が草本植物で、墓地の付近には草原がひろがっていたとされるが、祁連山の山麓に位置する立地からみると、少し離れたところには森林があったのかもしれない。いずれにせよ、前二千年紀前半の齊家文化・四壩文化では、まだブタ優位型がつづいていたことがわかる。

ところが、齊家文化に後續する甘肅東部の辛店文化になると、變化があらわれる。永靖縣張家嘴遺址では、鑑定された標本數でみると、ウシ一〇點、ヒツジ四點、ブタ四點、イヌ四點、ウマ三點、シカ一點であり、永靖縣姬家川遺址では、ヒツジがもっとも多く、ブタがそれにつき、ほかにウシ・シカ・ネズミ類などがあったという〔中國社科院考研一九八〇〕。ブタはなお存在しているが、辛店文化を境に草食動物のウシ科（ウシ・ヒツジ・ヤギなど）に首位の座をゆずり、新たにウマが登場したことは、牧畜の形成を示す重要な變化である。ヒツジ優位型の朱開溝遺址は前二千年紀前半、辛店文化はおよそ前二千年紀後半に位置づけられるから、中國西北部では前二千年紀に相前後してヒツジ優位型の農耕經濟に移行したことになる。そして、前二千年紀の末期、辛店文化に後續する甘肅東部の寺窪文化や青海東部の卡約文化ではブタがほぼ消失し、家畜はウシ・ウマ・ヒツジ・イヌの構成となり、完全に牧畜經濟に移行したと考えられる。

西周時代の青銅器には、北方の鬼方を征討した内容をもつ銘文があり、陝西省から出土したと傳える西周前期の小盂鼎

は俘虜一三〇八一人・車三〇兩・牛三五五頭・羊三八頭などを捕獲したことを記し、陝西省扶風縣下務子村から出土した西周後期の師同鼎は車馬五乘・大車二〇兩・羊一〇〇頭の戦利品をえたことを記している〔陝西周原扶風文管所 一九八二〕。このような多數の車や牛・羊をどこで捕獲したのかはわからないが、おそらくここで検討しているような西周の北邊や西邊で活動していた牧畜民から奪ったものだろう。鬼方が馬車のほかに牛の牽引する大車を用いていたことも、牛の畜力利用という面で興味深い。ちなみに中原でもっとも古い牛車の考古資料は、戰國前期の陝西省鳳翔縣八旗屯B一〇三號墓から出土した雙轅の牛車模型で、春秋後期の山西省渾源縣李峪村から出土したウシ形の青銅尊は、鼻環をつけているため、車か犁の牽引に用いるウシを象ったものと考えられるが、西周代にさかのぼる畜力利用の確かな例はまだ発見されていない。

狩獵採集↓遊動牧畜↓定住農耕という單線的な發展段階論は、今日では完全に否定されているが、生態系に應じて狩獵採集から牧畜と農耕とが別々に進化したのか、それとも有畜農業をへて牧畜文化が生成したのか、意見が分かれている。ここに検討した中國西北部における動物考古學の成果によれば、ブタを主とする有畜農業から、草原環境への生態系の遷移とともに、ウシ科（ウシ・ヒツジ・ヤギなど）を主とする有畜農業をへて、ウシ科とウマ科など群居性の有蹄類を放牧する牧畜文化が生成したものと考えられる。このような牧畜の生成プロセスが實證的に解明されつつある學術的意義はきわめて大きいといえるだろう。

二 ト骨の變化

動物の骨や龜甲などを焼灼したときに生じる龜裂から吉凶を占うことは、紀元前四千年紀にはじまり、殷代にもっとも盛行した。西周代よりそれはしだいに衰退していったが、『周禮』には大卜の官に龜卜をつかさどる卜師・卜人・龜人の

官があつたと記録し、漢代以後の史書には、西北の牧畜民は羊骨、東夷は牛や鹿の骨を用いた占卜がおこなわれたと伝える〔陳一九五六〕。『三國志』東夷傳倭人條に「その俗、事舉行來に、云爲する所あれば、輒ち骨を灼いて卜し、以て吉凶を占ひ、先ず卜する所を告ぐ。その辭は令龜の法の如く、火垢を視て兆を占う」とあるのは周知の通りである。このような占卜の材料は、神意を伝える媒介として人びとが特別に選別したものであり、おもに祭祀や饗宴の犠牲として供用される動物が用いられたから、犠牲を中心とする儀禮と密接な關係があつたと考えられる。

卜骨の材料は、薄くて幅ひろい平坦面をもつ肩胛骨がおもに用いられた。ヒツジ・ブタ（イノシシ）・シカの肩胛骨は平坦面が薄いので、灼だけで卜裂が生じるが、ウシの肩胛骨や龜甲は厚みがあるため、灼の部分にあらかじめ鑽や鑿をほどこして薄くする必要があつた。およそ龍山時代から二里頭時代までは灼のみだが、ウシの利用が多くなる二里頭後半期ごろから丸い錐狀工具で鑽をほどこし、肩胛棘（胛脊）を削除する加工（整治）がはじまる。そして、龜甲の利用が増加する殷後期には鑽と鑿をほどこし、關節窩（骨臼）を切除する整治がおこなわれて、占卜の方法が確立する。このような流れのなかで、卜骨の材料も變化していったが、それを時代別にみておこう。

まず、新石器時代の卜骨は、馬家窖文化石嶺下類型の甘肅省武山縣傅家門遺址の例がもっとも古く、前四千年紀後半に位置づけられる。それ以後、卜骨は中國西北部を中心に華北一帯にひろがりをみせ、謝端琚が一九九三年に發表した統計によると、河南・山西・山東・河北・遼寧・內蒙古・陝西・甘肅などの省區の三五遺址から卜骨が出土し、鑑定された一三三點はヒツジ七四點（五六％）、ブタ二八點（二二％）、ウシ二一點（一六％）、シカ一〇點（七％）で、甘肅ではヒツジが五三點にのぼるといふ〔謝一九九三〕。

動物の種類が報告されている卜骨について、新たにわたしが時代別に集成した表をみると、新石器時代の表2では、甘肅・陝西省の出土數が他地域に比べて多く、傅家門遺址など年代の古い例があるため、中國西北部に骨卜の起源地を想

表2 新石器時代の卜骨

省區	遺 址	時 代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文 獻
河南	浙川下王岡	仰韶後期	1		1				浙川下王岡
河南	浙川下王岡	龍山文化	3		2	1			浙川下王岡
河南	郟城郝家臺	龍山後期	1			1			華夏考古1992-3
河南	孟津小潘溝H42	龍山後期	1	1					考古1978-4
河南	安陽後岡H45	龍山文化	1			1			考古學報1985-1
河南	安陽大寨村南崗	龍山文化	8	2		4			考古學報1990-1
河南	湯陰白營	龍山前期	2			2			考古學集刊3
河南	湯陰白營	龍山後期	8	8					考古學集刊3
山西	襄汾陶寺	龍山文化	1			1			考古1980-1
山西	夏縣東下馮	龍山後期	1		1				考古學報1983-1
山西	忻州游邀H196	龍山後期	1			1			考古1989-4
山西	五臺陽白	仰韶後期	1	1					考古1997-4
陝西	長安客省莊	龍山文化	6		6				灋西發掘報告
陝西	岐山雙庵	龍山文化	6		6				考古學集刊3
陝西	臨潼康家	龍山文化	19		+	+	+		考古與文物1992-4
甘肅	靈臺橋村	齊家文化	17		6	11			考古與文物1980-3
甘肅	武山傅家門92F11	馬家窖文化	6	+	+	+			考古1995-4
甘肅	武威皇娘娘臺	齊家文化	26	1	21	4			考古學報1960-2
甘肅	武威皇娘娘臺	齊家文化	13		9	4			考古學報1978-4
甘肅	永靖大何莊	齊家文化	14		14				考古學報1974-2
寧夏	隆德頁河子	齊家文化	2	2					考古學研究(三)
內蒙古	準噶爾旗永興店	龍山文化	?		+	+			內蒙古考古文集1
內蒙古	準噶爾旗二里半	龍山文化	?	+	+	+			考古學集刊11
內蒙古	巴林左旗富河溝門	富河文化	?				+		考古1964-1
河北	任邱啞叭莊	龍山文化	3	1		1			文物春秋1992增刊
河北	唐山大城山	龍山文化	4	3			1		考古學報1959-3
山東	章丘城子崖下層	龍山文化?	6	4			1		城子崖
山東	曹縣莘冢集	龍山文化	1	1					考古1980-5
山東	茌平尚莊	龍山文化	5	+	+				考古學報1985-4

+は出土していることを示す。

表3 二里頭時代の卜骨

省區	遺 址	時 代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文 獻
河南	鄭州洛達廟	洛達廟期	3		+	+			文物參考資料1957-10
河南	鄭州洛達廟	洛達廟1期	1		1				華夏考古1989-4
河南	鄭州洛達廟	洛達廟2期	4		4				華夏考古1989-4
河南	鄭州洛達廟	洛達廟3期	?	+	+	+			華夏考古1989-4
河南	鄭州南關外下層	二里頭3,4期	11	9		1		1	考古學報1973-1

省區	遺址	時代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文獻
河南	鄭州黃委會	洛達廟後期	4	1	2	1			鄭州商城考古新發現與研究
河南	滎陽堅河H86	二里頭3期	1	1					考古學集刊10
河南	滎陽西史村T6	洛達廟1,2期	1	1					文物資料叢刊5
河南	滎陽西史村T9	二里頭3,4期	1	1					文物資料叢刊5
河南	鄭州上街	二里頭文化	2	1			1		考古1966-1
河南	新鄉潞王墳	先商文化	1				1		考古學報1960-1
河南	輝縣琉璃閣H1	先商文化	17	14			3		輝縣發掘報告
河南	密縣黃寨H1	二里頭2期	1	1					華夏考古1993-3
河南	密縣新砦	二里頭1期	?	+					考古1981-5
河南	鞏縣稍柴	二里頭2期	2	2					華夏考古1993-2
河南	鞏縣稍柴	二里頭3期	6	4	2				華夏考古1993-2
河南	臨汝煤山二期	二里頭1期	4		+		+		考古1975-5
河南	伊川白元	二里頭1期	1		1				中原文物1982-3
河南	伊川白元T11③	二里頭2期	1	1					中原文物1982-3
河南	登封王城崗	二里頭2期	5	+	+				登封王城崗與陽城
河南	登封王城崗	二里頭3期	6		+	+			登封王城崗與陽城
河南	登封王城崗	二里頭4期	3		+	+			登封王城崗與陽城
河南	偃師二里頭	二里頭文化	?	+	◎	◎			考古1961-2
河南	偃師二里頭	二里頭文化	?	+	+	+			考古1965-5
河南	偃師灰嘴	二里頭文化	4	1	3				華夏考古1990-1
河南	洛陽中州路	二里頭3期	1		1				洛陽中州路
河南	澠池鹿寺	二里頭文化	4	1	3				考古1964-9
河南	澠池鄭窯	二里頭1期	3				3		華夏考古1987-2
河南	澠池鄭窯	二里頭2期	13	+					華夏考古1987-2
河南	澠池鄭窯	二里頭3期	25				+		華夏考古1987-2
河南	陝縣西崖村	二里頭文化	2	2					華夏考古1989-1
河南	陝縣七里鋪	二里頭文化	24	4	11	9			考古學報1960-1
河南	浙川下王岡	二里頭1期	4		+		+		浙川下王岡
河南	浙川下王岡	二里頭3期	1			1			浙川下王岡
山西	垣曲豐村H301	東下馮類型	1		1				考古學集刊5
山西	永濟東馬鋪頭	東下馮類型	12		12				考古1980-3
山西	夏縣東下馮	Ⅱ期(二里頭)	8				8		夏縣東下馮
山西	夏縣東下馮	Ⅲ期(二里頭)	39	9	10	20			夏縣東下馮
山西	夏縣東下馮	Ⅳ期(二里頭)	57	+	+	40	+		夏縣東下馮
山西	垣曲商城	二里頭後期	?	+	+	+			垣曲商城
山西	太原光社	東太堡文化	11	◎					文物參考資料1957-1
山西	太原上莊村B	東太堡文化	1	1					和島誠一發掘資料
山西	翼城感軍	東太堡文化	1		1				考古1980-3
山西	忻州游遼	東太堡文化	1		1				考古1989-4
山西	婁煩河家莊H4	東太堡文化	1		1				晉中考古
甘肅	民樂東灰山	四壩文化	2		2				民樂東灰山考古
河北	磁縣下七垣第四層	先商文化	3		1				考古學報1979-2

殷代における畜産の變革

省區	遺 址	時 代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文 獻
河北	磁縣下七垣第三層	先商文化	12	◎	+				考古學報1979-2
河北	永年何莊	先商文化	2			2			華夏考古1992-4
內蒙古	赤峰夏家店	夏家店下層	?			+			考古1961-2
山東	章丘城子崖上層	岳石文化?	6	6					城子崖
山東	泗水尹家城	岳石文化	3	+			+		泗水尹家城
山東	桓臺史家	岳石文化	2		2				考古1997-11
山東	牟平照格莊	岳石文化	12		4	2	6		考古學報1986-4
遼寧	旅順羊頭窪	岳石文化	1				1		羊頭窪
安徽	壽縣閼雞臺	二里頭文化	30	+	◎		+		考古學研究(三)

+は出土していること、◎は出土数が比較的多いことを示す。

表4 殷代の卜骨・卜甲

省區	遺 址	時 代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文 獻
河南	鄭州1953-1955	二里岡下層	14	8	3	2		1	考古學報1957-1
河南	鄭州1953-1955	二里岡上層	17	9	1	7			考古學報1957-1
河南	鄭州1953-1955	人民公園期	32	9		2		21	考古學報1957-1
河南	鄭州南關外中層	二里岡下層	69	◎	+	+		+	考古學報1973-1
河南	鄭州南關外上層	二里岡上層	55	44	6	3		2	考古學報1973-1
河南	鄭州二里岡1952	二里岡文化	386	366	3	4	2	11	殷墟卜辭綜述
河南	鄭州二里岡1953	二里岡文化	401	328	20	37	4	12	鄭州二里岡
河南	鄭州木材公司	二里岡下層	8	+			+		華夏考古1990-4
河南	鄭州木材公司	二里岡上層	44	+		+	+	+	華夏考古1990-4
河南	鄭州黃委會H64	二里岡下層	1		1				鄭州商城考古新發現 與研究
河南	鄭州陳莊	二里岡文化	30	◎		1		3	中原文物1986-2
河南	登封王城崗	二里岡上層	4	3				1	登封王城崗與陽城
河南	登封王城崗	殷後期	5	3				2	登封王城崗與陽城
河南	鞏縣柏柴	二里岡上層	11	8	3				華夏考古1993-2
河南	偃師商城Ⅳ	二里岡期	2	2					考古1999-2
河南	偃師商城Ⅱ號址	二里岡上層	?	+	+				考古1995-11
河南	洛陽澗西孫旗屯	二里岡期?	?			+			文物參考資料1955-9
河南	新鄉潞王墳	二里岡上層	3		1				考古學報1960-1
河南	安陽郭村西南臺	殷代	2	2					考古學報1991-1
河南	安陽洹北花園莊	白家莊期	16	◎	+				考古1998-10
河南	安陽殷墟	殷後期	13931	11579				2352	劉1997
河南	安陽劉家莊	殷後期	3	3					華夏考古1997-2
河南	商丘鳩鵲	殷代	2	2					考古1983-2
山西	夏縣東下馮	V期(二里岡)	39	9	8	22			夏縣東下馮
山西	夏縣東下馮	Ⅵ期(二里岡)	30	25		5			夏縣東下馮
山西	垣曲商城	二里岡下層	?	+	+	+			垣曲商城
山西	垣曲商城	二里岡上層	12	◎	+	+		+	垣曲商城

省區	遺址	時代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文獻
山西	汾陽杏花村	二里岡上層	2	2					晉中考古
山西	洪趙坊堆村	殷後期	1	1					文物參考資料1956-7
陝西	藍田懷珍坊	二里岡上層	17	◎	◎				考古與文物1981-3
陝西	渭南南沙村	二里岡上層	13	◎	+				考古學報1980-3
陝西	武功鄭家坡H9	二里岡下層	1	1					文物1984-7
陝西	輝縣北村	二里岡上層	10	+	+		+		考古與文物1984-1
陝西	輝縣北村	二里岡上層	43	◎	+				考古學研究(二)
陝西	彬縣斷涇	殷後期	19	◎	+				考古學報1999-1
陝西	扶風壹家堡	殷後期	2	2					考古學研究(二)
陝西	長武碾子坡H151	殷後期	1	1					考古學集刊6
陝西	長功岸底H29	殷後期	1	1					考古與文物1993-3
陝西	綏德薛家渠	殷後期	?	+					文物1988-6
河北	武安趙客	二里岡上層	6	2				4	考古學報1992-3
河北	磁縣下潘汪	殷代	1	1					考古學報1975-1
河北	邢臺曹演莊下層	殷代	?	+	+	+		+	考古學報1958-4
河北	邢臺曹演莊上層	殷代	?	+	+			◎	考古學報1958-4
河北	邢臺尹郭村	殷代	21	16				5	文物1960-4
河北	內邱小驢頭	殷代	3	1					河北省考古文集
河北	隆堯雙碑	殷代	5	+					河北省考古文集
河北	藁城北龍宮	殷代	2	1				1	文物1985-10
河北	藁城臺西	殷代	494	401		2		91	藁城臺西商代遺址
河北	藁城臺西墓葬	殷代	11	11					藁城臺西商代遺址
河北	滄縣倪楊屯	殷代	1	1					考古1993-2
內蒙古	伊金霍洛朱開溝	龍山後期～二里岡上層	51	32	2	4	11		考古學報1996-4
山東	泗水尹家城	二里岡上層	11	8			1	1	泗水尹家城
山東	梁山青固堆	殷代	2	2					考古1962-1
山東	濟陽劉臺	殷代	1	1					考古1989-6
山東	濟寧潘廟	殷代	2	2					文物1991-2
山東	濟南大辛莊H17	殷代	16					16	文物1995-6
山東	壽光益都侯城	殷後期	2	2					文物1985-3
四川	成都十二橋	殷後期	8	+				+	文物1987-12
湖北	沙市周梁玉橋	殷後期	11	1				10	考古1986-4
湖北	江陵荊南寺	二里岡期	1					1	考古1989-8
湖北	清江香爐石6層	二里岡期	3					3	文物1995-9
湖北	清江香爐石5層	殷墟期	13					12	文物1995-9
江蘇	徐州高皇廟	殷代	?	+				+	考古學報1958-4
江蘇	銅山丘灣	殷代	?	+				+	考古1973-2
江蘇	南京西善橋大崗寺	湖熟文化	3					3	考古1962-3
江蘇	南京北陰陽營	湖熟文化	12	5				7	北陰陽營

+は出土していること、◎は出土数が比較的多いことを示す。

表5 周代の卜骨・卜甲

省區	遺 址	時 代	總數	ウシ	ヒツジ	ブタ	シカ	カメ	文 獻
河南	洛陽北窖	西周前期	35	11				24	考古1985-4
河南	洛陽鄭鐵一段H 1	西周中期	11						考古與文物1989-4
河南	登封王城岡	西周	3					3	登封王城岡與陽城
河南	淅川下王岡	西周前期	6			1		5	淅川下王岡
河南	信陽孫砦	西周	9					6	華夏考古1995-1
山西	侯馬鑄銅址	春秋	6					6	侯馬鑄銅遺址
陝西	長安張家坡	西周	35	25				10	灋西發掘報告
陝西	長安張家坡	西周	13	9				4	考古1964-9
陝西	扶風齊家村東	西周	7	5				2	文物1981-9
陝西	扶風雲塘M10	西周	1	1					文物1980-4
陝西	岐山賀家村墓地	西周	9	9					文物資料叢刊 8
甘肅	卓尼芭兒	寺窪前期	8	1	7				考古1994-1
山東	泗水尹家城	西周	1	1					泗水尹家城
山東	濟陽劉臺子M 3	西周	1	1					文物1985-12
山東	章丘寧家埠	西周中期	3	3					濟青公路報告集
山東	濰坊姚官莊	西周	7	7					文物資料叢刊 5
河北	邢臺南小汪H75	西周	1	1					文物春秋1992增刊
北京	琉璃河	西周	?	1					文物1996-6
北京	琉璃河	西周	?					◎	文物1997-6
遼寧	林西大井古銅礦	夏家店上層	1		1				文物資料叢刊 7
內蒙古	赤峰夏家店	夏家店上層	5			+			考古學報1974-1
湖北	圻春毛家嘴	西周	?	+				+	考古1962-1
湖北	隨州廟臺子	西周	1					1	西花園與廟臺子
湖北	隨州廟臺子	春秋	1	1					西花園與廟臺子
湖北	襄樊真武山	春秋	18					+	考古學集刊 9
湖北	宜城蕭家嶺	春秋	2	1				1	文物1999-1

+は出土していること、◎は出土数が比較的多いことを示す。

定する説が支持される。甘肅東部を中心とする齊家文化の内譯は、總數八一點で、ヒツジ五九點（七三%）、ブタ一九點（二三%）、ウシ三點（四%）となり、ヒツジの比率が高いのが特徴である（圖6）。甘肅省内でも陝西との省境に位置する靈臺縣橋村遺址では、ヒツジ六點にたいしてブタは一點あり、これを除外して甘肅中部に限定すれば、ヒツジの比率は八三%にも達する。齊家文化の動物骨構成比ではブタがもっとも高率であったが、前四千年紀に家畜のヒツジが出現し、ほぼ同時に骨卜の風習がはじまると、神意を伝える卜骨の材料としては、ブタではなくヒツジが選別的に用いられたのである。

ヒツジとブタの肩胛骨を比較すると、ヒツジのほうが平坦面がひろくて薄く、焼灼のときに卜裂が生じやすいという利點があるけれども、むしろ馬家窖文化の人びとの觀念に骨卜の風習とヒツジの飼養とが最初から強く結びつき、神意を伝える媒介としてヒツジに特化されたと考えるべきであろう。これはヒツジの飼養と骨卜の風習とが外來のものであることを示唆するが、起源の問題は將來の課題として、ここではこれ以上に立ち回らないことにしよう。

いっぽう新石器時代における河南省の内譯をみると、卜骨の總數は二三點で、ウシ一點（四八%）、ブタ九點（三九%）、ヒツジ三點（一二%）である。河南省浙川縣下王岡遺址から出土したヒツジの三點はいささか疑問があるけれども、それをふくめても河南を中心とする中原ではウシとブタの卜骨が中心で、その年代も前三千年紀後半の龍山文化に下る例が多い。甘肅と河南の中間に位置する陝西省岐山縣雙庵遺址や長安縣客省莊遺址などでは、卜骨のすべてがヒツジであるから、關中盆地まではヒツジの飼養と骨卜の風習とが結びついたまま傳播し、それより東には骨卜の風習だけがヒツジの飼育に先行して傳わったものと考えられる。

新石器時代の卜骨にシカがほとんど用いられていないことにも注意しておきたい。シカはふつう狩獵對象の野生動物であり、遺址から出土するシカの骨は、中國西北部をのぞく地域では、家畜のブタと並ぶ比率を占めていた。しかし、新石器時代から殷周時代を通じて、田獵と結びついた個別の祭祀をのぞけば、神にささげられる犠牲動物はほとんどが人手にかけて飼養した牛・羊・豕などの家畜であり、犠牲坑などの祭祀遺構から出土する動物骨をみても、シカが祭祀の犠牲として用いられた例はきわめて少ない。狩獵で射止めたシカは人びとの食肉として利用されることが多く、犠牲や神意を傳える卜骨の材料としては、家畜のほうが好ましいとされたのであろう。

紀元前二千年紀前半の二里頭時代になると、中原における卜骨の出土數が増加する（表3）。河南省の内譯は、種類ごとの數が報告された卜骨の總數は九三點で、ウシ四四點（四七%）、ヒツジ二八點（三〇%）、ブタ二〇點（二二%）、カ

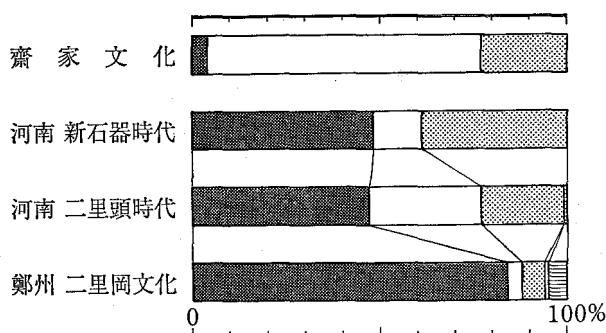


圖6 ト骨材料の時代的變化

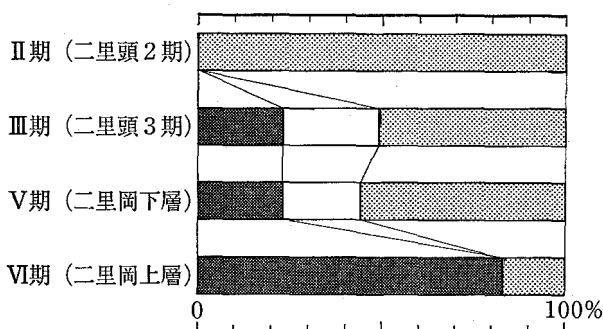


圖7 夏縣東下馮におけるト骨の變化
(凡例は圖1・圖2と同じ)

メ一點(一%)であり、新石器時代と比較すると、ウシの比率はほとんど変わらないけれども、ブタが減少した分、ヒツジが増加している(圖6)。これはヒツジの飼育が西からじょじょにひろがってきたからで、河南省でも西部の黄土臺地にある遺址ではヒツジの比率が高い。たとえば陝縣七里鋪遺址でのヒツジ骨は四六%を占め、二里頭文化の中心地である偃師市二里頭遺址ではウシ・ヒツジ・ブタのト骨があり、ヒツジとブタが比較的多いと報告されている。しかし、山西西南部の状況はやや複雑であり、黄河に近い永濟市東馬鋪頭遺址では一二點のト骨すべてがヒツジであるのにたいして、夏縣東下馮遺址では數量の詳細が明らかにされているII・III期のト骨は總數四七點で、ブタ二八點(六〇%)、ヒツジ一

〇點(二一%)、ウシ九點(一九%)と、ブタの比率が高いかわりにヒツジとウシの比率が低くなっている。反對に河南東部の華北平原ではウシの比率が高く、輝縣琉璃閣遺址の一號灰坑(井戸)ではト骨の總數一七點で、ウシ一四點(八二%)、ブタ三點(一八%)である。したがって、中原では西の黄土臺地ではヒツジの比率が高く、東の華北平原ではウシの比率が高いという傾向がうかがえよう。

山東半島の先端に位置する牟平縣照格莊遺址は、岳石文化の代表的な遺址であるが、出土したト骨の半數がシカであった。シカのト骨は、ほかにも山東省泗水縣尹家城遺址や遼寧省旅順市羊頭窪遺址など

でも出土し、岳石文化では狩獵對象のシカを骨卜に用いる風習があったことがわかる。日本の彌生文化遺址から出土するト骨もシカの肩胛骨が多いとされるから〔池澤 一九八七〕、東夷の風習として相互に關係するものであらう。

つづいて紀元前二千年紀中ごろの殷前期（二里岡文化）になると、ト骨の増加はさらに顯著になり（表6）、河南省鄭州市二里岡遺址では一九五二年と一九五三年の二年間の發掘で出土したト骨の總數は七八七點にも達している。鄭州市内の全體では、ト骨の總數は九〇五點で、ウシ七六四點（八四％）、ブタ五五點（六％）、カメ四七點（五％）、ヒツジ三三點（四％）、シカ六點（一％）である。肩胛骨は動物一頭につき左右の二點しか採取できないから、これは破片をふくめた數字であるけれども、骨卜のために膨大な數の動物が屠殺されたことがわかる。なかでも大家畜のウシの比率は、河南省の新石器時代から二里頭時代にはほぼ横ばいであつたのにたいして、殷前期になると一舉に倍增する畫期的な變化を示している。そして、この時期の鄭州におけるブタ・ヒツジ・シカのト骨は全部を合わせても一〇％を占めるにすぎず、つづく殷後期の安陽市殷墟ではウシ以外のト骨はきわめて例外的になつてしまうことから、殷人は神意を伝えるト骨の材料として殷前期の段階からウシに特化しつゝあつたと考えられる。いっぽうト甲は、二里頭時代にさかのぼる鄭州市南關外遺址下層の例〔河南省博 一九七三〕がもっとも古く、殷前期には鄭州を中心に微増し、殷後期にはウシのト骨と並んで多用されていることから、これも殷人の創始による習俗とみなしうる。ただし、鄭州でもト甲の増加は殷後期に併行する人民公園期からであり〔河南省文化局 一九五七〕、上述の鄭州の統計にはその資料をもふくめていることを付記しておかなければならない。

このように骨卜の盛行とウシ中心のト骨への轉換は殷前期に起こり、それが殷人の習俗として定着したことが明らかになつた。それはまた、殷代に成立するウシ優位型都市文化とも密接な關係をもつ、同一の文化現象であることはまちがいない。先行する二里頭時代において、ウシのト骨は河南東部の華北平原を中心にひろがっていたことから、それは殷人の

出自を推測するひとつの手がかりとなるだろう。

山西省夏縣東下馮遺址は、二里頭時代の聚落の上に二里岡下層期の城郭が築かれている。南面城壁の長さは四四〇mで、山西省垣曲縣南關・河南省焦作市府城・湖北省黃陂縣盤龍城遺址と同じように、殷王朝の前線基地というべき王權直屬の城郭都市と考えられる〔岡村一九九八〕。ここでは二里頭時代から殷前期まで時期ごとの卜骨の詳細が報告され〔中國社科院考研ほか一九八八〕、圖7で具體的にみると、ウシは東下馮Ⅲ・Ⅴ期に二三%であったのがⅥ期には八三%と四倍近くに急増するいっぽう、ヒツジはⅢ・Ⅴ期の二一・二六%からⅥ期には〇%に、ブタはⅢ・Ⅴ期の五一・五六%からⅥ期には一七%に落ちこんでいる。つまり、二里岡下層期（東下馮Ⅴ期）まではブタが過半を占め、二里頭時代からの變化は小さかったけれども、二里岡上層期（東下馮Ⅵ期）にウシ中心の卜骨に大きく轉換したのである。殷的な骨卜の習俗が、城郭が築かれる二里岡下層期ではなく、二里岡上層期に遅れたことは、城郭内の住民の多くは殷人以外に出自をもち、殷人の文化を段階的に受容したことを暗示している。

殷後期になると、ウシの卜骨と龜甲による占卜の制度が確立し、殷文化の擴大とともに各地にそれがひろがっていった。それまで骨卜の風習がなかった淮河流域や長江流域の四川盆地・江漢平原などにも卜骨・卜甲があらわれた（表4）。河南省安陽市殷墟における卜骨と卜甲との關係は、卜辭の内容には差がないけれども、第二期（祖庚・祖甲）と第五期（帝乙・帝辛）には卜甲が多く、第四期（武乙・文丁）はウシの卜骨が多く用いられた¹⁰といふ〔伊藤一九五八〕、それは貞卜用の甲骨を貢納した集團のちがいを反映しているのかもしれない。占卜の風習は、この殷後期をピークとしてしだいに衰退していくが、中原の殷周文化の影響がおよんだ地域では、ウシ卜骨と卜甲とにほぼ限定され、鑽・鑿の手法にも共通性があらわれている（表5）。しかし、その圏外ではそれぞれ独自の骨卜がおこなわれ、西周時代に併行する寺窪文化前期の甘肅省卓尼縣芭兒遺址では卜骨合計八點のうち、ヒツジは七點、ウシは一點で、鑽・鑿がほどこされていない。寺窪文

化はすでに牧畜段階に進化しているが、これは齊家文化の骨卜の傳統を繼承したものであろう。いっぽう日本列島では、彌生時代にシカ・イノシシ・イルカの卜骨があり、鑽・鑿をほどこしていないが、古墳時代には卜骨のほかにアカウミガメの卜甲があらわれ、卜骨には圓鑽、卜甲には方鑿が用いられている〔池澤 一九八七〕。

三 殷代における家畜飼養の多様化

遺址から出土する動物骨の構成比にもとづき、哺乳動物の消費類型として、さまざまな野生動物を網羅的に狩獵する野獸優位型、シカ科の選別的な狩獵をおこなうシカ優位型、家畜のブタが主體のブタ優位型、家畜のウシが主體のウシ優位型、家畜のヒツジが主體のヒツジ優位型の五類型に分類し、その時間的・空間的動態を検討した。その結果、新石器時代になると、狩獵・漁撈・採集を中心とする中國東北部では網羅的な野獸優位型がなお存続しているものの、黄河と長江の兩大河にはぐくまれた農耕文化ではシカ優位型とブタ優位型がひろがっていったことが明らかになった。すなわち中國の農耕社會では、森林性のシカ科を選別的に狩獵するいっぽうで、ブタを主とする家畜の飼育が普遍化し、總じてみれば、時間とともにブタを主とする家畜の割合が増加したのである。

動物學の觀點からいえば、ブタとイヌは年二回出産し、一回の出産にブタは一〇頭前後、イヌは三〜一二頭の子を産むのにたいして、ウシとウマは年一回の出産で、一回に子は一頭がふつうであり、ヒツジも年一回の出産で、一回に子は一、二頭である。このように繁殖能力において、家畜のなかでブタはもっとも優れている。また、飼料を肉にかえる速度と効率でも、ブタはもっとも大きい潜在能力をもっており、一生の間にブタは餌にふくまれるエネルギーの三五%を肉にかえるが、ヒツジは一三%、ウシは六・五%にすぎないといわれている〔ハリス 一九九四〕。したがって、もし車や犁の牽引、

乳や毛などの利用がなく、ただ屠殺して食肉に消費するのであれば、ブタはもともと經濟效率が高く、大家畜のウシやウマはもともと經濟效率が悪いことになる。しかも、ブタとイヌは食性がひろいので飼いやすく、自給自足を目的とした農業生産の副業として集落内での小規模な飼養が可能であるが、草食性のウシ・ウマ・ヒツジの飼養には、越冬用の飼料を大量に確保しなければならず、ひろい牧草地をかかえた専門的な牧畜經營が必要となる。食肉を目的に家畜を飼育していた新石器時代の農耕社會において、ブタがつねに優位にあり、その後も今日にいたるまでブタが中華料理の中心的な食材となっているのは、このような特性と密接な關係がある〔岡村 一九九八〕。もともと、ブタやイヌの飼料は人間の食糧と重なるところが大きく、森林や河川などの自然資源に恵まれているところでは、狩獵や漁撈に依存するほうが經濟的であるし、牧草の豊かな環境のところでは草食性のウシやヒツジを飼養するほうが有利であることはいうまでもない。

前三千年紀の龍山時代は、社會が複雑化し、中國の各地で文明形成へと大きく踏みだした變動の時代である。黄河・長江流域における哺乳動物の消費類型はブタ優位型が普遍的にひろがり、旱地雜穀農耕／水田稻作農耕にみるような華北と華南との差異はみられない。黄河下流域と長江流域では、ほとんどの遺址でシカを主とする野生動物が三分の一を占め、新石器時代を通じて森林を有する生態系に大きな變動はなかったと考えられる。また、黄河上流域をのぞいて、ウシは山東省濰縣魯家口遺址の一〇%を最高に、ほとんどが數%ていどの低率であり、イヌも福建省閩侯縣曇石山遺址の一三%を最高に、やはり數%ていどの比率となる遺址が多く、ブタにはほぼ特化した畜産が廣域にひろがっていた。もっとも、自然環境のちがいによる小さな變異が認められ、山東省泗水縣尹家城遺址や陝西省臨潼縣姜寨遺址はシカが六五・六六%を占めるシカ優位型であるいっぽう、黄土臺地にある河南省澠池縣班村遺址や黄土高原地帯に位置する内蒙古伊金霍洛旗朱開溝遺址・甘肅省武山縣傅家門遺址・甘肅省永靖縣大何莊遺址では、野生動物の比率が一〇%前後に落ちこんで家畜に大きく比重をおいた構成比となっている。とくに前四千年紀に出現したヒツジは黄土高原地帯を中心にしだいに

増加し、朱開溝・傳家門・大何莊の三遺址ではヒツジが一八〇三三%を占めている。また、ウシは朱開溝遺址で二二%、傳家門遺址で九%を占め、黃土高原地帯では森林環境から草原環境への遷移にもなつて、草食性のウシ科がしだいに増加していった。したがつて、龍山時代の地域性をあえて指摘するならば、東西の差が比較的大きく、栽培穀物のちがいをもとに想定されているような南北の差異はむしろ小さかつたといえるだろう。

黃河流域における卜骨のひろがりも龍山時代の大きな變化のひとつである。現状では前四千年紀後半の馬家窖文化石嶺下類型がもっとも古く、ヒツジの飼養とともに卜骨は西から東へと傳播している。神意を伝える卜骨の材料は、人手にかけて飼養している家畜が優先され、黃土高原の齊家文化ではおもにヒツジの肩胛骨、黃河中・下流域ではおもにウシ、ついでブタの肩胛骨が用いられた。卜骨の有無では華北と華南とのちがいがあり、卜骨の種類では東西に差異があらわれていたのである。

中國最初の王朝が誕生する前二千年紀になると、ブタ優位型ではぼ齊一化していた哺乳動物の消費類型が多様化する。黃河中・下流域の農耕村落では従前からのブタ優位型がそのまま繼續するいっぽう、黃河上流域の黃土高原地帯ではヒツジ優位型の牧畜經濟、長江流域ではシカ優位型の稻作農耕に轉換し、それぞれの地域性が顯在化するとともに、殷の王都ではウシ優位型の都市文化が生成し、都市と農村の階層分化が顯著になる。

まず黃河中・下流域の華北平原をみると、北京市鎮江營・塔照遺址（商周第三期と第四期との二時期）・山東省泗水縣尹家城遺址（岳石文化と殷・漢代との二時期）・山東省兗州市西吳寺遺址の三遺址五時期はほぼ近似した構成比を示し、ブタは三一〇三八%、イヌは一二〇一九%、ウシは四〇一一%、ヒツジは〇〇一%、シカを主とする野生動物は三九〇四二%である。草原性のヒツジがきわめて少なく、森林性の野生動物の比率が龍山時代以來ほとんど變わっていないため、生態系には大きな變動がなかつたようである。しかし、龍山時代と比べてウシの比率が微増していることは、ウシの卜骨

の増加とともに、ウシの飼養をすすめた殷周王朝の文化的要因が考えられ、また、イヌの比率が一〇%以上に増加していることは、『周禮』職方氏の記載を勘案すれば、それを食用にした可能性を示唆するものであらう。

つぎに黄河上流域の黄土高原地帯をみると、草原環境への遷移にもなつてヒツジの比重が高まり、前二千年紀前半には首位の座をブタと交代してヒツジ優位型の農耕經濟が生成した。人間と同じ雜食性で、乾燥に弱く、長距離の移動に適さないブタは、殷後期に併行する前二千年紀末までに家畜から完全に排除され、草食性のウシ科やウマ科などの有蹄類に限定した牧畜經濟が形成される。具體的にみると、ヒツジ優位型の内蒙古自治區伊金霍洛旗朱開溝遺址は、ヒツジ・ブタ・ウシの飼育と雜穀栽培をおこなう定住的聚落であつたが、甘肅東部の辛店文化ではウシ科とブタのほか、新たにウマの飼養がはじまり、つづく寺窪文化ではブタが消失して牧畜經濟への移行がほぼ完了した。河川の近くなど水の便のよいところでは穀物栽培がなお存続していたと推測されるが、氣候の乾燥冷涼化と草原環境への遷移とともに、前二千年紀のなかでブタを主とする有畜農業からウシ科を主とする有畜農業をへて牧畜經濟が生成したのである。

いっぽう長江流域の稻作農耕地帶では、前二千年紀にブタ優位型から一轉してシカ優位型に轉換する。長江下流域の上海市馬橋遺址と長江中流域の湖北省沙市市周梁玉橋遺址では、シカがブタの三〜四倍に達し、家畜飼養よりも狩獵・漁撈に比重を移す方向に逆轉している。森林や河川の自然資源に恵まれた長江流域では、水田稻作に集約化すると同時に、家畜生産の負擔を軽減し、漁撈・採集とニホンシカを主とするシカ科動物の狩獵を選別的におこなうようになったのであり、『周禮』職方氏に長江下流域の揚州と中流域の荊州では家畜を飼育せず、もっぱら稻を栽培するといひ、『史記』貨殖列傳に「楚越の地は、地廣く人希にして、稻を飯にし、魚を羹にす。或いは火耕水耨し、果隋蠃蛤は賈を待たずして足る。地勢は食饒く、飢饉の患なし」といふ「魚米之郷」の生活は股代に起源することがわかる。もっとも、春秋・戰國時代の楚墓や湖北省荊州市鳳凰山一六八號墓などの前漢墓からは、しばしばウシ・ヒツジ・ブタの骨が出土し、貴族層は中原と

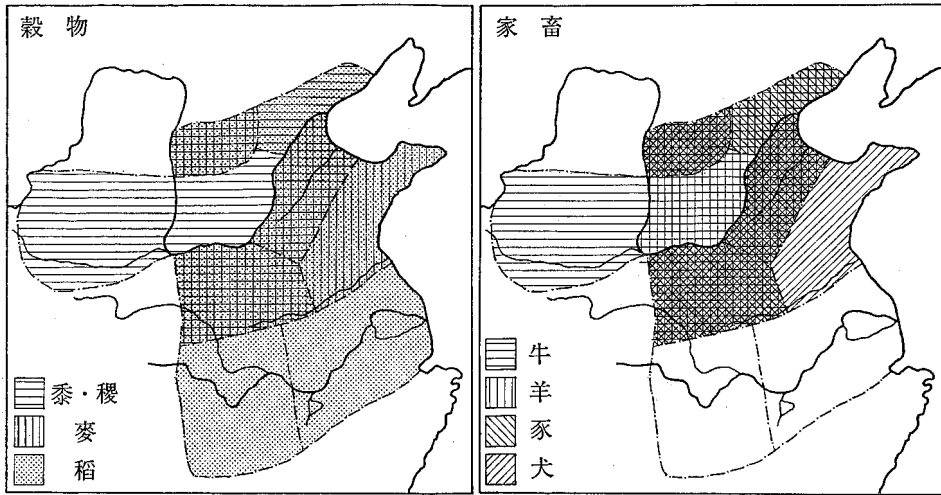


圖8 『周禮』職方氏にみる家畜・穀物の分布

同じ禮制にしたがった肉食儀禮をおこなっていたから、殷代から『史記』貨殖列傳までのそれは農村の一般的な生活風景を反映したものにはかならない。

以上のような遺址出土の動物骨構成比によって、殷代には華北平原、黃土高原地帯、長江流域の地域性が顕在化したことが明らかとなった。参考までにこれを先秦時代における畜産と穀物の地域性を記録した『周禮』職方氏と對比しておこう。そこでは中國の九州それぞれについて「東南を揚州と曰い、……その畜は鳥獸に宜しく、その穀は稻に宜し。正南を荊州と曰い、……その畜は鳥獸に宜しく、その穀は稻に宜し。河南を豫州と曰い、……その畜は六擾に宜しく、その穀は五種に宜し。正東を青州と曰い、……その畜は雞・狗に宜しく、その穀は稻・麥に宜し。河東を兗州と曰い、……その畜は六擾に宜しく、その穀は四種に宜し。正西を雍州と曰い、……その畜は牛・馬に宜しく、その穀は黍・稷に宜し。東北を幽州と曰い、……その畜は四擾に宜しく、その穀は三種に宜し。河内を冀州と曰い、……その畜は牛・羊に宜しく、その穀は黍・稷に宜し。正北を并州と曰い、……その畜は五擾に宜しく、その穀は五種に宜し」と記している。鄭玄注によると、家畜の六擾は馬・牛・羊・豕・犬・雞、五擾は馬・牛・羊・犬・豕、四擾は馬・牛・羊・豕、鳥獸

は孔雀・鸞・鵠・鵠・犀・象の屬、穀物の五種は黍・稷・菽・麥・稻、四種は黍・稷・稻・麥、三種は黍・稷・稻を指すという。『周禮』職方氏の九州は、『尙書』禹貢の地域區分とちがって徐州と梁州のかわりに并州と幽州がはいっているが、これを現在のおよその地域名を併記して整理すると、つぎのようになる。

幽州(遼西)	……馬・牛・羊・豕	黍・稷	稻
并州(晉北)	……馬・牛・羊・豕・犬	黍・稷・菽・稻・麥	
豫州(河南)	……馬・牛・羊・豕・犬・雞	黍・稷・菽・稻・麥	
兗州(山東)	……馬・牛・羊・豕・犬・雞	黍・稷	稻・麥
雍州(陝西)	……馬・牛	黍・稷	
冀州(晉中南部)	……牛・羊	黍・稷	
青州(徐州)	……	犬・雞	稻・麥
揚州(長江下流)	……鳥獸		稻
荊州(長江中流)	……鳥獸		稻

まず家畜と穀物との相關をみると、草食性の馬・牛・羊は雜穀の黍・稷との相關性が高く、當然のことながら地域的には華北に偏っている。また、雜食性の豕・犬は雜穀と組みあわせて栽培される稻・麥との相關性が高く、地域的には溫暖濕潤な華北東部に偏っている。とくに東部沿海地域の青州は、家畜が犬と雞、穀物が稻と麥に限定され、牛・羊・豕が缺落している。いっぽう、稻の栽培に特化した長江流域の揚州・荊州では、家畜がなく、野生動物のみとなっている。このような『周禮』職方氏にみる家畜と穀物の地域性は、おそらく戦國から漢代の狀況をもとに記述され、西北の牧畜民をはじめとする周邊世界は對象外となっているが、動物考古學から復元できる動物相と對比してみると、あるていど實際を反

映したものと考えられる。もっとも、殷周から漢代の動植物にかんする考古學は、『周禮』職方氏を詳細に檢證するほどの研究の蓄積がなく、これ以上の議論は今後の課題としなければならない。

殷代におけるもうひとつの變革は、ウシ優位型都市文化の形成である。殷前期（二里岡文化）に河南省の鄭州と偃師に巨大な城郭に圍まれた王都が出現するが、鄭州の外城郭内の一般居住區と考えられる鄭州市二里岡遺址では一三五一點の動物骨が出土し、その内譯はウシ五七%、ブタ一七%、ヒツジ九%と、ウシを主とする家畜の比率がひじょうに高くなっている。殷後期のみやこ河南省安陽市殷墟の手工業區と考えられる苗圃北地遺址では、一五〇〇點あまりの動物骨はウシ六五%、ブタ一五%、ヒツジ九%と、二里岡遺址に近似した構成比となり、殷墟の王宮・宗廟區にある花園莊南地遺址二七號灰坑では三〇〇〇〇點近い厖大な動物骨の九八%以上がウシと報告されている。このようにウシ優位型は殷前期に突如としてはじまり、王宮に近いほどウシの比率が高く、ウシをふくめて出土動物骨の數量が爆發的に増大し、その大半が家畜であることに注目される。

溫暖濕潤な生態環境に適應し、ブタの特性を最大限に利用したブタ優位型の農耕文化が普遍的にひろがるなかで、ウシ優位型の都市文化は殷の王都に突如として形成された。前二千年紀における遺址出土動物骨の分析データがなおいちために、それをもとにウシ優位型の形成過程を細かく述べつけることはできないけれども、卜骨の數量と材質の變化をみることによってその缺を補うことができる。すなわち、殷代に先行する二里頭時代（前二千年紀前半）の卜骨は、河南西部の黃土臺地ではヒツジ、河南東部の華北平原ではウシの比率が高い傾向がみられた。大型宮殿や青銅器・玉器を副葬した墓が発見され、夏王朝の王都と推定されている偃師市二里頭遺址では、ヒツジとブタの卜骨が比較的多いと報告されている。ところが殷前期になると卜骨の數量が爆發的に増加し、王都の鄭州ではウシの卜骨が八四%に達している。ついで殷後期には、卜骨はほぼウシに特化されるとともに、新たに卜甲が盛行する。また、二里岡文化の擴大とともにウシを主とする

卜骨の風習がひろがり、山西省夏縣東下馮遺址では、二里岡下層期まではブタの卜骨が過半を占めていたが、二里岡上層期にはウシの卜骨が鄭州に比肩する八三%まで激増している。したがって、神意を伝える卜骨の材料をウシに特化する風習の淵源は、二里頭文化の中心地ではなく、東の華北平原に求めることが可能であり、ブタ優位の生態的・社會的環境のなかで、ウシを優位とする家畜文化を創出し、勢力の擴大とともにほかの地域にそれをひろげていったのは、華北平原に基盤をおく殷人であった可能性が高い。これに關連して想起されるのが、殷の祖先の王亥が牛飼いであったという傳説である。王亥は殷墟卜辭のなかでは高祖の稱號をもち、盛大な祭祀が周期的におこなわれた先公の一人であるが〔内藤一九一六／王一九二二〕、『山海經』大荒東經に「王亥は有易・河伯に僕牛を託す。有易は王亥を殺して僕牛を取る」とい、その郭璞注に引く『竹書紀年』は「殷王子亥は有易に賓して淫す。有易の君縣臣は殺してこれを放つ。この故に殷の主甲微は師を河伯に假りて以て有易を伐ち、これを滅ぼす。遂にその君縣臣を殺せり」という。ウシを優位とする殷人の風習が、このような王亥僕牛の傳説をつくりだしたのであらう。

しかし、ウシ優位の畜産は殷人の文化的風習であつたとしても、食肉用の消費財として家畜をみたばあい、經濟效率の高いブタにかえてウシを優位とし、家畜を大量に消費する經濟的側面や社會的背景は別に考察しなければならぬ。

畜力を耕作に利用することのなかつた新石器時代において、大家畜のウシは、飼養にかかる負擔が大きく、本格的に飼養するにはいたらなかつた。しかし、負擔が大きければ大きいほどウシの價値は高くなり、神靈への供物や威信財としての重要性は増していった。神意を伝える卜骨にウシを用いる比率が遺址出土のものに比べて高いことは、それを裏づける。殷代に國家機構がしだいに整備されていくなかで、家畜の大量消費を可能にする大規模な畜産がおこなわれるようになり、殷墟卜辭には「貞う、王は往きて牛を省せんか（合集一一一七五）」や「貞う、王は敦に往きて牛を省せんか（合集一一一七二）」など、殷王が牛の飼養を省察したことを記している。また、『禮記』祭義には「古は天子・諸侯必ず養

獸の官あり。歳時に及びて齋戒沐浴して躬ら之に朝し、犧牷祭牲必ず是に於いて之を取る」と、王侯たちは祭祀犠牲の飼育をみずから監督したといい、『周禮』に牧人や牛人などの「養獸の官」が犠牲の飼育をおこなったことを記している。このような祭祀の犠牲を目的とした國家的な畜産がはじまると同時に、王權によって牛を最上位とする牛・羊・豕の順の格づけがおこなわれ、それが禮制としてまとめられていったのであろう。

殷の王都からウシをはじめとする家畜骨が大量に出土し、卜骨の數量が殷代に飛躍的に増加したのは、國家的な家畜の生産と供給の體制が確立することによって、その大量消費が可能となったからである。これはそれまでの農耕村落における自給自足の畜産から他給依存の都市的な消費經濟が成立したことを意味する。王宮内の支配者層はもちろんのこと、一般庶民や手工業者の居住区である鄭州二里岡遺址や殷墟苗圃北地遺址でも、外部の農耕村落とはちがってウシを主とする家畜の比率が壓倒的に多いから、王都に居住する庶民層もまた自給自足の農業生産者ではなく、食肉の供給を外部に依存する消費者であったことがわかる。

以上のように、殷代における畜産の變革には、地域性の顯在化とウシ優位型都市文化の生成とのふたつの意義がある。畜産の地域性は生態系の遷移にもなつてブタ優位型の齊一性がくずれ、華北のブタ優位型雜穀農耕、華南のシカ優位型稻作農耕、黃土高原地帯のヒツジ優位型牧畜の三類型に生業が大きく分かれることになった。また、華北ではブタ優位型の自給自足の安定した農耕村落がひろがるなかで、殷王朝の誕生にもなつてウシ優位型都市文化が成立した。殷人はウシに威信財としての價值を付加し、牛・羊・豕の格づけをおこなうとともに、國家的な家畜の生産と供給の體制を編成して外部依存の都市的な消費經濟をつくりあげたのである。これは國家形成史におけるひとつの大きな變革であつたといえよう。

注

- (1) 家畜飼養の形態には、牧畜(Pastoralism)と畜産(Animal industry)とがある。牧畜とは共有の土地にウシ科(ウシ・ヒツジ・ヤギなど)やウマ科など群居性の有蹄類を放牧する生業を指すのにないて、畜産とは私的に所有された牧場や畜舎で家畜を飼養する生業を指すのがふつうである[福井 一九八七]。
- (2) 動物の名稱は、動物學的なばあいはカタカナを用い、必要に応じて現代中國語の名稱を括弧でいれる。
- (3) 尹家城遺址の大型墓からは合計一八八點のブタ下顎骨が出土したが、表1の統計では、これを除外している。なお、ブタ下顎骨を墓に副葬する風習は、前六千年紀の河南省舞陽縣賈湖遺址がもっとも古く[河南省考 一九九二]、前三千年紀には中國のひろい範圍にひろがっている。大汶口文化や山東龍山文化の墓に副葬されたブタ下顎骨を交換や貢納によって集積された威信財とみる説があるが[Kim 1994]、むしろ鉤形の牙には辟邪の意味があつて、ブタのかわりにヒツジやシカの下顎骨が用いられるばあひがあり[春成 一九九三]、新石器時代においてブタの飼養は個別の小規模經營を基本としていたことから、威信財説にはしなない。
- (4) 馬橋遺址の一九六〇年代の出土動物骨について、中國側の報告を再整理した甲元眞之は、ブタ一〇點、シカ科七一一點で、シカ科はブタの六・五倍と推算している[甲元 一九九二]。ただし、これは良渚文化から馬橋文化の兩文化の資料が混在している。
- (5) 殷・西周時代の湖熟文化に屬する南京市北陰陽營遺址の第二・第三層は、種類ごとの數値は不明だが、ブタの出土量が多いと報告されている[南京博物院 一九九三]。東西に長くのびた長江流域は、地域ごとに多様な生業がおこなわれた可能性がある。
- (6) 二里岡遺址は一九五〇年の發見以來、數次にわたつて發掘がおこなわれているが、一九五三年の發掘で幅二〇メートルほどの版築城壁が出
- (7) 土し[河南省 一九五九]、それはその後の調査で外城郭の一部であることが判明した[裴 一九九二]。一九五二年秋の發掘區はその地點から西に約三〇〇mのところであり、外城郭の方向から城郭内に位置するものと考ええる。
- (8) 殷墟では薛家莊南地・大司空村・北辛莊などでも骨器製作址が發見されている。小屯の東南二kmにある薛家莊南地では、鋸で切断した骨料や骨片が百數十點出土し、ブタとウシが多く、ついでシカとヒツジがあるという[趙 一九五八]。大司空村ではウシ、ブタ、イヌ、ヒツジ、シカなどの骨とシカの角があり、なかでもウシが多く、北辛莊ではウシ、ウマ、ブタ、ヒツジ、イヌなどの骨があり、なかでもウシとブタが多いという[中國社科院考古 一九八七]。
- (9) アンダーソンが調査した馬家窖文化の青海省貴德縣羅漢堂遺址では、シカやガゼル(羚羊)が多く、ブタが少ないと報告されている[Bylin-Althin 1946]。その細かい數値はわからないが、中國西北部でも青海省のように森林がひろがっているところではシカ優位型が存在した可能性がある。
- (10) 河南省淅川縣下王岡遺址第五層から出土したヒツジのト骨が仰韶文化後期(前三千年紀前半)と報告され[河南省文物研究所 一九八九]、これを中國最古のト骨とする意見もあつたが、傳家門遺址をはじめとする甘肅・青海地域の調査と研究により、ト骨は中國西北部で最初に出現し、そこから各地に傳播したとする説がこんにちでは有力である[荒木 一九九八]。しかも、河南省の仰韶文化遺址からはヒツジ骨がほとんど出土せず、下王岡遺址のほかでヒツジのト骨が出現するのは河南省では二里頭時代に下ることからみれば、その報告には疑問がある。
- (11) 甲骨の分期は研究者によって相違する。キートリーは第三・第四期にト骨が多く、第五期にト甲が多いという[Keightley 1978: 10-11, Appendix 2]。

引用文獻

- 荒木日呂子 一九九八「中國新石器時代のト骨とその社會的意義について」『東洋大學中國哲學文學科紀要』第六號
- 安徽省文物考古研究所 一九九二「安徽省濉溪縣石山子遺址動物骨骼鑒定與研究」『考古』第三期
- 安志敏 一九五四「一九五二年秋季鄭州二里岡發掘記」『考古學報』第八期
- 池澤勇一 一九八七「日本のト骨」『考古學ジャーナル』九月號(第二八一號)
- 伊藤道治 一九五八「中國古代社會の記錄」(『世界考古學大系 東アジアⅡ』第六卷、平凡社)
- 袁靖 一九九〇a「論中國新石器時代居民獲取肉食資源的方式」『考古學報』第一期
- 袁靖 一九九〇b「鄭州南順城街窖藏坑出土動物骨骼鑒定報告」『鄭州商代銅器窖藏』科學出版社
- 袁靖・宋建 一九九七「上海市馬橋遺址出土動物骨骼的初步研究」『考古學報』第二期
- 王國維 一九二一「殷卜辭中所見先公先王考」『觀堂集林』卷九
- 王宜濤 一九九一「紫荊遺址動物群及其古環境意義」『環境考古研究』第一輯、科學出版社
- 大貫靜夫 一九九五「環渤海初期雜穀農耕文化的展開」『東北アジアの考古學研究』同朋舍出版
- 岡村秀典 一九九八「農耕社會と文明の形成」『岩波講座世界歴史』第三卷、岩波書店
- 岡村秀典 一九九九「中國古代王權と祭祀」『考古學研究』第四六卷第二號
- 河南省博物館 一九七三「鄭州南關外商代遺址的發掘」『考古學報』第一期
- 河南省文化局文物工作隊第一隊 一九五七「鄭州商代遺址的發掘」『考古學

報第一期

- 河南省文化局文物工作隊 一九五九「鄭州二里岡」中國田野考古報告集考古學專刊丁種第七號、科學出版社
- 河南省文物研究所 一九九六「河南滎陽豎河遺址發掘報告」『考古學集刊』第一〇集
- 河南省文物研究所・長江流域規劃辦公室考古隊河南分隊 一九八九「浙川下王岡」文物出版社
- 河南省文物考古研究所 一九九〇「舞陽賈湖」科學出版社
- 甘肅省博物館 一九七八「武威皇娘娘臺遺址第四次發掘」『考古學報』第四期
- 甘肅省文物考古研究所・吉林大學北方考古研究室編 一九九八「民樂東灰山」考古・科學出版社
- 韓立剛 一九九四「湖北省黃梅縣塞墩遺址動物考古學研究」『文物研究』第九輯
- 祁國琴 一九七七「福建閩侯曇石山新石器時代遺址中出土的獸骨」『古脊椎動物與古人類』第一五卷第四期
- 吳建民 一九九一「龍南新石器時代遺址出土動物遺骸的初步鑒定」『東南文化』第三・四期
- 黃蘊平 一九九六「內蒙古朱開溝遺址獸骨的鑒定與研究」『考古學報』第四期
- 黃蘊平 一九九九「動物遺骸鑒定報告」『鎮江營與塔照』中國大百科全書出版社
- 黃文綏 一九七八「圩墩新石器時代遺址出土動物遺骸的鑒定」『考古』第四期
- 黃象洪・曹克清 一九八七「崧澤遺址中的人類和動物遺骸」『崧澤』文物出版社
- 甲元眞之 一九九二「長江と黄河」(『國立歷史民俗博物館研究報告』第四〇集)

黑龍江省文物考古工作隊 一九七九「密山縣新開流遺址」『考古學報』第四期

國家文物局考古領隊培訓班 一九九〇「甌州西吳寺」文物出版社

山東大學歷史系考古專業教研室編 一九九〇「泗水尹家城」文物出版社

謝端琚 一九九三「中國原始卜骨」『文物天地』第六期

周本雄 一九九四「白家村遺址動物遺骸鑒定報告」『臨潼白家村』中國田野考古報告集考古學專刊丁種第四四號、巴蜀書社

周本雄 一九九四「師趙村與西山坪遺址的動物遺存」『師趙村與西山坪』中國田野考古報告集考古學專刊丁種第五三號、中國大百科全書出版社

徐光冀 一九八四「富河文化的發現與研究」『新中國考古發現與研究』文物出版社

西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼縣博物館 一九八八「姜寨」文物出版社

陝西周原扶風文管所 一九八二「周原發現師同鼎」『文物』第十二期

蘇州博物館・吳江縣文物管理委員會 一九九〇「江蘇吳江龍南新石器時代村落遺址第一、二次發掘簡報」『文物』第七期

谷泰 一九九七「神・人・家畜」平凡社

中國科學院考古研究所甘肅工作隊 一九七四「甘肅永靖大何莊遺址發掘報告」『考古學報』第二期

中國科學院考古研究所甘肅工作隊 一九七五「甘肅永靖秦魏家齊家文化墓地」『考古學報』第二期

中國社會科學院考古研究所山東工作隊・山東省濰坊地區藝術館 一九八五「濰縣魯家口新石器時代遺址」『考古學報』第三期

中國社會科學院考古研究所甘肅工作隊 一九八〇「甘肅永靖張家嘴與姬家川遺址的發掘」『考古學報』第二期

中國社會科學院考古研究所安陽隊 一九八五・一九七九年安陽後岡遺址發掘報告『考古學報』第一期

中國社會科學院考古研究所編 一九八七「殷墟發掘報告（一九五八—一九六二）」文物出版社

中國社會科學院考古研究所安陽隊 一九九一・一九八二—一九八四年安陽苗圃北地股代遺址的發掘『考古學報』第一期

中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 一九九二・一九八六—一九八七年安陽花園莊南地發掘報告『考古學報』第一期

中國社會科學院考古研究所編 一九九六「大甸子」中國田野考古報告集考古學專刊丁種第四八號、科學出版社

中國社會科學院考古研究所 一九九七「敖漢趙寶溝」中國田野考古報告集考古學專刊丁種第五二號、中國大百科全書出版社

中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 一九九八「河南安陽市洹北花園莊一九九七年發掘簡報」『考古』第一〇期

中國社會科學院考古研究所・中國歷史博物館・山西省考古研究所 一九八八「夏縣東下馮」中國田野考古報告集考古學專刊丁種第三五號、文物出版社

趙霞光 一九五八「安陽市西郊的殷代文化遺址」『文物參考資料』第一期

張秉權 一九六八「祭祀卜辭中的犧牲」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三八本

陳全家 一九九三「農安左家山遺址動物骨骼鑒定及痕迹研究」『青果集』吉林大學考古專業成立二十周年考古論文集、知識出版社

陳夢家 一九五六「殷虛卜辭綜述」科學出版社

唐際根・徐廣德 一九九九「洹北花園莊遺址與盤庚遷殷問題」『中國文物報』四月一四日

德日進 (Teilhard de Chardin)・楊鍾健 一九三六「安陽殷虛之哺乳動物群」『中國古生物誌』丙種第一二號第一冊

內蒙古文物考古研究所 一九八八「內蒙古朱開溝遺址」『考古學報』第三期

內藤 湖南 一九一六「王亥」『藝文』第七年第七號（『內藤湖南全集』第

七卷、筑摩書房、一九七〇年に再録)

內蒙古文物考古研究所・日本京都中國考古學研究會岱海地區聯合考察隊

一九九七「涼城縣王墓山坡上遺址發掘報告」『內蒙古文物考古文集』第二輯、中國大百科辭書出版社

南京博物院

裴明相 一九九三「北陰陽營」文物出版社
一九九二「鄭州商代王城的布局及其文化內涵」『華夏考古』第二期

林已奈夫 一九五八「安陽殷墟哺乳動物群について」『甲骨學』第六號

ハリス (Marvin Harris) 一九九四「食と文化の謎」(板橋作美譯、岩波書店、原書 *Good to Eat, Riddles of Food and Culture*, 1985)

春成 秀爾 一九九三「豚の下顎骨懸架——彌生時代における辟邪の習俗」『國立歷史民俗博物館研究報告』第五〇集

範雪春 一九九九「六里井遺址動物遺骸鑑定」『兗州六里井』科學出版社

潘保田・徐叔鷹 一九八九「青海高原東部第四紀自然環境探討」『科學通報』第三四卷第七號

傅仁義 一九八四「大連郭家村遺址的動物遺骨」『考古學報』第三期

傅仁義 一九九二「平安堡遺址獸骨鑑定報告」『考古學報』第四期

傅勇 一九八八「陝西扶風案板遺址動物遺存的研究」『考古與文物』第五・六期

福井 勝義 一九八七「牧畜社會へのアプローチと課題」『牧畜文化の原像』日本放送出版協會

彭錦華 一九九〇「湖北沙市周梁玉橋遺址動物骨骸的鑑定與研究」『考古與文物』第一期

松丸 道雄 一九六三「殷墟卜辭中の田獵地について」『東洋文化研究所紀要』第三冊

楊鍾健・劉東生 一九四九「安陽殷墟之哺乳動物群補遺」『中國考古學報』四

橫田 禎昭 一九八三「新石器時代中國の家畜」『中國古代の東西文化交流』雄山閣出版

李 民 昌 一九九一「江蘇沭陽萬北新石器時代遺址出土動物遺骸的初步鑑定」『東南文化』第三・四期

李民昌・張敏・湯陵華 一九九七「高郵龍虬莊遺址史前人類生存環境與經濟生活」『東南文化』第二期

Bylin-Althin, M. 1946 The Sites of Chi Chia Ping and Lo Han T'ang in Kansu, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, No.18

Crabtree, P. J. 1990 *Zoarchaeology and Complex Societies: Some Uses of Faunal Analysis for the Study of Trade, Social Status, and Ethnicity, Archaeological Method and Theory*, Vol.2, pp.155-205

Keightley, D. N. 1978 *Sources of Shang History, The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China*, University of California Press

Kim, S. O. 1994 *Burials, Pigs, Political Prestige in Neolithic China, Current Anthropology*, Vol.35, No.2

Zeder, M. A. 1991 *Feeding Cities: Specialized Animal Economy in the Ancient Near East*, Smithsonian Institution Press